

裸の王様は
何処へ行く

山中與隆
YAMAMURA YUKIYUKI

Duo-Yamanka

裸の王様は
何処へ行く

山中與隆

目次

裸の王様は何処へ行く 1

プロローグ 1

自分たちのための、室内楽専用ホール 20

ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団 64

こけら落とし 102

ホイット教授のレッスン 160

念願のトリオ演奏会 227

葉羅嘉太郎の迷い 265

ヨーロツパ室内楽聴き歩きの旅へ 280

アマチュアの室内楽フェスティバル 304

挑戦 348

「この物語の登場人物など」 376

編者あとがき 382

裸の王様は何処へ行く

山中與隆

プロローグ

葉羅嘉太郎は、夜中に突然目を覚ました。昨夜何

気なく見ていたテレビで聞いたイベント請負会社の話を思い出したからだ。

彼が仲間とこれまで長年続けてきた自分たちの弦楽四重奏団のささやかな発表会を、「発表会」などと遠慮したいいい方にせず、堂々と「コンサート」と銘打って、イベント請負会社にマネージメントさせて大々的にやることにしたらどうだろうという自らの思いつきに興奮して目が冴えてきた。彼は隣で眠

っている妻の嘉子の軽いいびきのような寝息を聞きながら、じつと天井を見つめて自分の新しいアイデアをどんどん膨らませていった。

「コンサート」という以上、会場は公民館の集會室などではなくちやんとしたコンサートホールで行う。案内チラシはワープロで作ったようなものではなく一流のデザイナーによる両面カラー刷りのもの、ポスターも作って楽器屋やプレイガイドなどに張り

出す。もちろんプログラムもデザイン、装丁、用紙、印刷など広告代理店のプロのデザイナーに依頼する。そしてそれらのすべてをイベント会社に取りしきらせる。

嘉太郎は、会場を埋め尽くした聴衆が自分たちの演奏するベートーヴェン後期の弦楽四重奏曲を、息をひそめるようにして聴き入っている姿を想像しただけで感動した。

このような演奏会を少なくとも月一回は開きたい。ベートーヴェン、ブラームス、モーツァルト、ハイドンの傑作だけでも何年分ものレパートリーは充分にあるから、現在の自分たちには技術的に無理のあるラヴェル、ドビュッシー、バルトーク、ヤナーチークなどに手を伸ばす必要はないだろう。ただビオラの劇的なフレーズで始まるスメタナは妻のためにも挑戦したい。

嘉太郎の空想は広がる一方だ。アマチュアであるにもかかわらず聴く者に感銘を与える演奏は当然世間の目に留まり、いろいろなところからお呼びがかかるだろう。もちろん入場料は無料である。これは「アマチュアは、技量の良し悪しにかかわらず無料であるべきだ」という葉羅嘉太郎の昔からの信念である。

少し空想が途切れた後、嘉太郎は大ホールの千以

上ある薄暗い客席に十数名という聞き手しかいない
場面を思い浮かべた。それでも会を重ねるうちに評
判が広がって聴衆が増えてくるに違いないと無理や
り考えようとした。

しかしその逆だつてあり得る。そのうち金に飽か
して作った立派なチラシとは裏腹な、立派なのは並
んでいる曲名だけで、そこで鳴らされる演奏のほう
は聞くに値しない内容だという噂がひろがっていく。

客は減る一方で、噂を知らずにチラシやポスターに釣られて迷い込んだ数名の運の悪い客だけになってしまいかもしれない。薄暗い会場の各扉の前には清楚な制服を着たすらりとした美人ぞろいの客席案内の女性が、姿勢を正して椅子に腰掛けている。きつと彼女たちは何処にいるかさえ見つけがたい十数名の客と、千に余る空席を目の前にしながら、毎回繰り返される濁った音とよたついた音楽の流れ、いや

流れにさえなっていない心とまなない演奏の終わるのを、平静を装った穏やかな表情を保ちながらひたすら待っている。仮にそんなに酷くないにしても、この想像の方が現実に近いだろうと嘉太郎は思った。

いやそんなことではいけない、練習は毎日のようにしよう。午前中は個人練習、午後は合わせ練習がいい。いや、メンバーはみなそれなりの年である。午後はゆっくりと休んだり体育館に行って泳いだり

トレーニングしたりして体力もつけておく必要がある。合奏練習は夜だ。毎日は無理でも週三日はそのような日にしたい。

午前中の個人練習のために、自宅に練習室を増築しよう。今は嘉太郎と嘉子が別々に練習できるように防音室が二つある。四重奏団の残りの二人のためにあと二部屋、そうだ使っていない部屋を防音しよう。しかし、いま月に一回か二回やっている合わせ練

習を週三回するとなると、月に十二回にもなる。そんな猛練習にみんなは耐えられるだろうか。葉羅嘉太郎はメンバーの顔をひとりずつ思い浮かべてみた。セカンド・バイオリンの町田里子はよく孫の世話を押し付けられると、いつて練習の日程調整に苦労していた。チェロの熊本匡はいろいろなグループに頭を突っ込んでいるので忙しい。ただそれらは土日の場合が多いので、平日に練習できる葉羅たちのグル

ープの練習日にはたいてい都合がつく。ビオラは妻の嘉子だから、これはファースト・バイオリンの自分と同じスケジュールで問題ない。

仮に四人が揃う練習日が月に十二回取れたとしても、それだけ合わせ練習をするからには相当に個人練習をしてかからないと合わせ練習の回数を増やす意味がない。胸をときめかせながら膨らんできた想像が、現実的になり始めて萎んでくると同時に葉羅

嘉太郎は眠気を催して、いつの間にか眠りに落ちていった。

葉羅嘉太郎は朝食前にインターネットを開いてイベント請負会社というのを調べてみた。彼が考えていたことにぴったりの会社が地元にあった。それは「ミュージック・プロデュース」という会社で、会社案内によると市場調査から、コンサート後の次回

に向けての取り組み方まで嘉太郎が期待するすべてのことがサービス内容として謳つてある。

「よし、いける」

嘉太郎は昨夜夢が萎んで眠りに落ちたことを忘れたかのように、再びむらむらとやる気が出てくるのだつた。

嘉太郎は朝食のときに、この思い付きを嘉子に話した。そして締めくくりに駄目押しのようにな、

「金は幾らでもある。こういうことに使わなかつたら何に使うんだ」といいたした。

嘉子は嘉太郎が話し終わるまで黙って聞いていたが、話が終わってからもしばらく何もいわなかつた。何しろ嘉太郎の話は長く、いろいろな内容を含んでいた。なので嘉子は頭の中で咀嚼していたのだ。

「面白そうだけど、里子さんたち乗ってくるかしら」

と、昨夜嘉太郎が眠気を催し始めたときの思いと同じことをいった。

「それが問題なんだ。熊本君は大丈夫かもしれないけどね」

「里子さん、駄目だとしたらお孫さんのことでしよう。その日はうちにつれてきてもらって、ベビーシッターを頼んで見てもらうことにしたら」

嘉子も嘉太郎に負けないくらい大きなことが好きで、

空想的な話を一笑に付したりしないに乗ってくる。だが、

「でも問題は、そんなことよりも私たちの技量ね」と決定的な言葉を口にした。

「だから毎日のように練習することにするのさ」

「そんなことで、大ホールの聴衆を唸らせるようなベートーヴェンが弾けたら苦労しないわよ。だって私の先生たちのカルテットだって、こないだのなん

てどうということなかつたじゃない」

「あの人たちはカルテット以外に毎日のように本業のオーケストラの演奏があつて、練習時間が充分に取れないのじゃないかな」

「そうかもしれないけど、基本技術は私たちとは月とすつぽんじやないの」

「まあね」

「それに、結構あわせ練習は何回もしたつておつし

やつてたわよ」

このような現実の話に落ちていくと、葉羅嘉太郎が夢見たような話は成り立つはずがない。それでも彼は諦めたりしていなかった。

自分たちのための、室内楽専用ホール

葉羅嘉太郎のこの非現実的な空想ともいえる構想は、彼の何となく回してしまつたダイヤルで、動き出してしまつたのだ。

嘉太郎は、先日インターネットで調べた《ミュージック・プロデュース》に電話したのだ。どんなことをする会社なのか一応調べてみたいというつもり

で。

電話に出た男は、「はら病院」の引退した大先生と聞いて姿勢を正したのが声から察せられた。はら病院は胃腸科としては広島を中心によく知られており、その評判で遠くからも葉羅嘉太郎先生に診てもらおうとやってくる患者もいるほどだった。また資産家としても知られており、いろいろなところへの寄付などでもその名は知れ渡っていた。また無類の音楽

好きで自らもバイオリンを弾き、その腕はかなりのものだという噂もかなり広まっていたのだった。

ミュージック・プロデュースの担当者はちよつと話の端を聞いただけで、葉羅大先生が若い音楽家たちを応援する演奏会を企画しようとしていると思つた。

「とにかくお話を伺いに参ります」

と軽い調子でいって、その日の午後二時のアポイン

トを取った。

担当者はアシスタントとともに葉羅邸の玄関前に立った。呼び鈴を押す前に担当者は腕時計を見た。そのまましばらくその秒針を見ていたが、午後二時の瞬間を待ってチャイムを押した。

葉羅嘉太郎は、チャイムが壁の電波時計の秒針が二時〇分〇秒を指した瞬間だったので思わず

「おっ」

と思った。時間に正確な人間は信頼できると葉羅は常日頃から考えているので、このときもこの担当者
の顔を見る前から好印象を持った。

玄関を開けると、いかにもてきぱきと仕事をやり
そうな三十代くらいの黒いスーツに身を固めた青年
と、やはり黒いスーツにミニスカートという若い女
性が立っていた。青年は《ミュージック・プロデュ

ースの担当者であることを告げ、電話の礼をいった。

応接室に入ると青年はミュージックマネージメント主任・山科武彦という名刺を差し出した。そして、「こちらには同じ課の吉川といいます。よろしく願いします」

と同伴の女性を紹介して、あらためて二人そろって深々と頭を下げた。嘉太郎は、彼らが明らかに世間

に知られた葉羅嘉太郎を意識した態度だなと思った。勧められて二人は、ごく浅くソファ―に腰を下ろした。深々と座った嘉太郎と対照的であつた。女性のミニスカ―トから大きく出た真つ白い膝頭が嘉太郎にはまぶしかつた。それをチラツとみた嘉太郎の視線に気付いたのか吉川という女性は、微かに表情を弛ませた。

「早速ですが、お電話でおっしゃつたコンサ―トと

いうのは、先生が応援なさっている若い音楽家たちに演奏の場を与えるというものなのでしようね」

山科はすでに自分の中でイメージを作っているようだ。山科にそう切り出されて、嘉太郎はややとまどつたがすぐに当然の予想であることに思い至つた。それで自分が考えていたことを何となくいい出しにくくなつた。

「いや、そういうこともありますがそれとは違つた

ものも含めてちよつと考えていることがあるのでね。それでお宅の仕事内容について聞きたかったのです」

黒い鞆からノートを出した吉川は膝の上で嘉太郎が喋ったことをサラサラとボールペンを走らせてメモしている。そのノートで吉川の白い膝頭は隠れた。自分の予想が必ずしもぴつたり当たっていないかつたらしいことを悟った山科は

「わかりました」

といつてから、自社の業務内容を一から説明し始めた。さまざまなイベントの企画、運営と手広い業務内容については前置きとして簡単にすませると、すぐにコンサートに関する内容の説明に入った。このあたり駆け出しの営業マンと違って、客の要望を的確に掴んで話す山科を、嘉太郎は頭の良い男だと思つた。山科は、嘉太郎がインターネットで調べたと

きにこの会社のサービス内容として掲げてあつたことをわかり易く簡潔に説明した。

嘉太郎は、インターネットのキャッチフレーズにあつた、

「アーティストの知名度に頼らないで公演を成功に導く」

という一文を思い出して、山科に質問した。それに対して山科は、

「例えば若い音楽家だとすると、必ずしも知名度は高くありません。そこで私たちはその音楽家の持っている力を徹底的に把握することに努めて、その長所と魅力をアピールすることと、公演を行う地域の音楽に関する市場調査も徹底的に行います。また同様な公演がシリーズとして回を重ねるような場合は、一度聴きに来てくださったお客さまが、次にまた来たくなるような状況を、演奏内容だけに頼るのでは

なく、会場の雰囲気からお客様の案内、舞台のデザインまですべてに気を配ります。そのためにある程度しつかりしたホールを選定させていただくようにしております。もちろんローカルなより身近な、例えば公民館の集会室のような会場の場合でもお断りするというようなことはいたしません。それはそれなりにその場に合った心温まるような企画が出来ますので」

と、落ち度のない説明であつた。

これを聞きながら、嘉太郎は『その音楽家の持っている力を徹底的に把握する』というところについて考えていた。その音楽家というのが自分たちだつたら、徹底的に把握しようとしたら、いったい何が出てくるのだろうか。

嘉太郎は、いま山科の頭の中にある若い音楽家と
いうのは、おそらく音楽学校を出てフリーで細々と

活動している演奏家や、音楽学校に在籍中でも将来有望と考える演奏家のことだろうと思った。あるいはすでにプロの音楽家といえるものの、演奏会の機会に必ずしも恵まれていない優秀な人たちのことを思い浮かべて喋っているのかもしれない。そのような音楽家たちはたいていミュージック・プロデュースのような会社を雇って自分のコンサートを企画するような資力はない。葉羅のような財力のある支援

者や、何らかの公的なプロジェクトなどにうまく採用された場合のみ可能なことである。

嘉太郎はそのような山科の想定と、自分が考えていることの落差の大きさを意識しないわけにはいかない。それは茶を持ってきてそのまま話を聞いていた嘉子の思いも同じだった。嘉太郎は、山科が思い浮かべているらしい若い演奏家たちのために、自分が考えているようなことをするのも悪くないなと

思ったりするのだった。しかし、いまはやはりそれよりも年齢的にあと何年楽器を弾いておれるかカウントダウン段階に入っていると考えている自分たちのために何かとてつもないことを打ち上げたいのだ。嘉太郎は大先生には珍しく、少し口ごもりながら、「山科さん、吉川さんも笑わないで聞いてほしいのですが、」

こう嘉太郎が切り出すと山科と吉川はとんでもない

というように手を振り、首を横に振って、拝聴するという姿勢をとった。

「私が今日あなたたちに来ていただいたのは、確かにコンサート企画についてお聞きしたり相談したりしたいと思ったのですが、そこで演奏するのは山科さんが想像なさっているような有望な若い音楽家じゃなくて、私なんですよ。この老いぼれた私やここにいる女房もいっしょにやっているカルテットな

んですよ」

もちろん山科たちがこれを聞いて笑ったりしないだろうし、引き下がることもないのはわかっていた。山科は表情も変えずに瞬時に頭を切り変えたようだ。「それは素晴らしいアイデアではないですか。若い人たちの演奏会なら珍しくありませんが、先生のような人生経験を積まれた方の年期の入ったご趣味の披露となるとそうあるものではありませんからね。わ

れわれ喜んでお手伝いさせていただきます」と笑顔を作った。

しかし、そこには明らかに戸惑いがあるように嘉太郎には感じられた。山科の傍で吉川は、表情を読み取られないように下を向いてノートに向かって何か書いている。嘉太郎はそのボールペンの握り方が、美しい女性には似合わないわしづかみのような持ち方だと思った。

嘉太郎は喋ってしまふと気が楽になつた。大家や一流の演奏家たちのコンサートも手掛けるミュージック・プロデューズの社員である彼らが心の中で笑おうがどうしようが、金を出して仕事を依頼するのはこつちなんだから構うものかと開き直つた。しかし山科はさらにフオローするようになつた。

「先生のバイオリンの腕前はかねてから噂に聞いております。長年培われたものですから是非素晴らし

い発表会をもたれることをお勧めします」
とお世辞交じりの言葉になった。嘉太郎は「発表会」
とはいつていないのに、山科は「演奏会」とはいわ
ずに「発表会」にしてしまっている。

「いやいや、私がソロをするわけではありません。
さつきいったように、われわれ長年続けてきたカル
テットがありましたね。その発表会というか演奏
会のことですよ。勿論無料のコンサートですけどね。

しかしせつかくやるんだたら、しみつたれた形に
したくないんでね。我々のような未熟な演奏を聴い
てくださる方々にもちよつと贅沢な気分になつても
らいたいと思つて、いいホールでいい雰囲気を作つ
てもらいたいと考えてみたんですよ。そんなのでも
考えてもらえますかね」

葉羅嘉太郎は山科の顔を覗き込むようにいつた。
「わかりました。きつとご満足いただけけるものがご

提案できると思いますが。しかし一つ問題があると思
うのは、この街には東京の紀尾井ホールとか、大阪
のいずみホールのような良い室内楽専用ホールがあ
りません。その点はいかがお考えですか」
山科はあくまでも丁重な姿勢を崩さず嘉太郎にきい
た。

「ホールはこの街にあるものを使うしかないだろう
な。ホテルや結婚式場という手もあるが、音響はよ

くないからね」

「おっしゃるとおりです。とにかく一度わたしどもでたたき台を作つてまいりますので、それをもとにご検討いただくということでは」

こういつて山科と助手の吉川は、足が埋まりそのような絨毯が敷かれた豪華な応接室を辞した。

二人は、玄関の向かい側に四、五台分もあるうかという来客用の駐車スペースに止めてあつた《ミュ

ージック・プロデュースの社名の入ったバンに乗り込むと、長いエントランスを走ってから、大きな木作りの門から一般道に出た。玄関前では使用人の女性が二人の車を見送った。

走り始めてから山科は大きく深呼吸をした。そして隣の吉川に向かって、

「むかし、大金持ちの医者が金に飽かしてストラデ

イバリウスのバイオリンを買って、それで唯一自分が弾ける《キラキラ星》を弾いていたという揶揄を聞いたことがあるけど、それを思い出してしまったよ」

と、少しあきれたというような調子でいった。

「そうですか、私はあの方たちのカルテットを聞いたことがないので」

という吉川の返事を聞いて、山科はもうかれこれ一

年以上もこうして一緒に仕事をしているのに、いつまでたつても打ち解けない女だと思つた。山科はそれ以上いま聞いてきた話についてあれこれいうのをやめて、約束した提案の内容について頭をめぐらせ始めた。

山科たちが帰つたあと、居間のソファ―に身を沈めなおした嘉太郎の頭を、バカげたことを始めてし

まつたかなという思いが一瞬かすめたが、持ち前のおおらかさでそれを打ち消した。そしてすぐに前向きに考え始めた。確かにこの街にはいい室内楽ホールがない。山科のこの言葉が嘉太郎の頭から離れなかつた。

「作るか」

葉羅嘉太郎は声に出して独り言をいった。百五十か二百席くらいの響きを充分に吟味したホールがいい。

駐車スペースさえ取れば少し郊外でもいい。ただ郊外電車の沿線からあまり外れないようにしたい。自家用車を持たない人たちも楽に聴きに来れることも大切だ。

嘉太郎は、これまでも街で適当な建物や土地を見ると、すぐにカルテットハウスを思い浮かべるのだ。そしていまその時が来たという思いが嘉太郎の頭を駆け巡りだした。少し贅沢をして、ヨーロツ

パにコンサートを開きに行くのとはわけが違
う。一億だろうか、二億だろうか。建設費だけでな
く維持をどうするかも問題になる。貸しホールにす
るとしても、この街での需要がそれほど大きいとは
思えない。しかし、葉羅嘉太郎という男はそのよう
な現状に即した考え方をしない。現状を変えればい
いじゃないかと考えるのだ。

イギリスにあるヴィグモアホールは、世界の室内

楽団にとつて、そこで演奏することが一流の証になつていふという。ここまで考えると、嘉太郎はこの考えが素晴らしいものに思えてきた。いまや嘉太郎の空想ともいえる思ひは、自分たちのカルテットの演奏会からはなれて、まずその演奏会のための理想的なホールをこの街に作りたいという考えに移つていた。

「日本のヴィグモアホールにすればいい」

三億くらいまでなら何とか自分の自由に出来る金がある。その上嘉太郎は誰にもいってないが昨年の暮れに友人たちとの忘年会の帰りに運試しといつて買ったジャンボ宝くじで三億円当たっていた。宝くじなど買ったことのない嘉太郎は当選発表も完全に忘れていたが、友人から、

「あの売り場の前に三億円の当たりが出たと書いてあったが、お前どうだった」

といわれてはじめて調べたところ前後賞合わせて三億円の大当たりだったのだ。欲のないところや、必要のないところに金は集まるといふが、まったくそれを絵に描いたようなものであつた。嘉太郎はそれをどこかに寄付でもしようかと思ひながら取り扱ひ銀行に預けたままにしてある。また葉羅嘉太郎は街の中心部に持っている自分名義の土地がある。その土地は息子を独立させるための用意してい

た土地であつた。息子がすんなり嘉太郎のはら病院を継いだので、当面息子のために新たな病院を建てる必要がなくなつたのだ。それを処分すれば、それだけでも建設資金としては充分であろう。嘉太郎は次々に沸きあがる自分の考えが現実のものと感じられてわくわくしていた。

一か月後のある午後、葉羅嘉太郎は自宅の応接室

で太陽建設の担当者三名と向き合っていた。太陽建設は音響設計、コンサートホール建設では国内外に定評のある大手建設会社である。大阪に建てたコンサートホールはわが国初の音楽専用ホールとして評判になり、コンサートホール建設ラッシュのきつかけとなった。

打合せは、もちろん葉羅嘉太郎が自らのカルテットの公演のために室内楽専用ホールを建てるといふ、

とんでもない計画のためのものだ。まるでかつてのヨーロッパの国王ならやったであろうようなことである。しかし、葉羅嘉太郎は真剣であつた。この街に優れた室内楽専用ホールを作つて、室内楽の興隆をはかりやがて国内はもとよりアジアの、いや世界の室内楽のメツカにしようという壮大な夢を描いていたのである。決して自分のカルテットが演奏するためだけにホールを作ろうという、秀吉ならやりか

ねないようなことではないのである。

嘉太郎が考えているのは、太陽建設が大阪に作ったような大ホールではなく、二百席程度のごく小さな室内楽専用ホールである。

このときすでに土地は確保しており、建設資金も手当てがついていた。嘉太郎は一応息子にも了解を求めたが、息子は建設する建物の目的にも資金にも何の意見を挟まなかった。

ただ街の中心部にある土地の利用については、息子は息子なりに少し考えることがあったようだったが、今すぐということでもなかつたので、そのときにはまた何とかなるだろうということでした。妻の嘉子は、もともと大きなことが嫌いではない性格もあって、むしろ面白がっているような向きもあった。

太陽建設の担当者との打ち合わせは、それからお

よそ三か月にわたつて入念に行われた。その間に嘉太郎は担当者を伴つて大阪、京都、東京、仙台などに室内楽専用ホールを見に行つたりもした。それは、優れた室内楽専用ホールを見てそれらを参考にしようというよりも、むしろそれら国内の著名なホールのどれにもないユニークな物を作りたいというのが嘉太郎の狙いであつた。

やがて郊外の瀬戸内海を臨む、およそ四千平方メ

ートルという土地に建設は始まった。もともとある樹木は、必要に応じて残され、通りがかりの人から見ると、緑の木立の中に大邸宅が建てられるようにみえた。郊外電車の駅から歩いて五分という好立地だが、敷地内に百台程度の駐車スペースも確保した。息子は父親の趣味にも、その趣味が高じた何事にもたいした関心は示さなかったが、それでも建設が進んで建物の姿が見えてくると、子供たちをつれて

建設現場を訪れ、

「これがおじいちゃんの夢だよ」

と孫たちに見せたりした。葉羅家の孫たちにとってこのおじいちゃん、おばあちゃんは、自分たち孫の相手をしてくれる人ではなく、もっぱら彼ら自身のやりたいことに向かっている、どちらかという関係の薄い存在であった。

ホールは百八十席のこじんまりしたものである。

木張りの内装は落ち着きと気品があり、ロビーの海側は全面ガラスになっていて瀬戸内海に浮かぶ島々の眺めが見渡せる。時間によつては空と海が茜色に染まる夕焼けも見られる。ホールのほかに楽屋となる控え室が二つある。ともに二十四平方メートルほどで、楽屋としてだけでなく練習も出来る。音が漏れないように防音も施されている。もうひとつ事務室、受付、管理人室をかねた部屋があり、嘉太郎は

管理人を常駐させたいと考えていた。外回りと建屋内の清掃にはしかるべき業者を常時入れて、ホール全体を常に最高の状態に保つことを考えた。

葉羅嘉太郎にとっても膨大な建設費のほかに、出来上がったあととも少くない経費が持続的に必要であった。それを息子の代になった病院の収益から賄うわけにはいかない。嘉太郎は、年間四百公演もこなすというロンドンのヴィグモアホールのようななれ

ば、それくらいの経費は充分に出るだろうと、出来上がる前から「獲らぬ狸の皮算用」をしていた。

ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団

カルテットハウスがほぼ出来上がったころ、嘉太

郎はミュージック・プロデュースの山科武彦を呼んだ。あれ以来山科には、自らホールを作ることをいって自分たちのコンサートの企画は一時保留にしてあつたのだ。嘉太郎は内装も出来上がり、外回りの整備の段階に入っているホールに山科を案内した。

「建設中は、この前を通るたびに素晴らしいものが出て来るなと思つて見ていましたが、こうして見せていただくと、想像をはるかに超えた素晴らしさです

ね」

と褒め称えるのだった。並んで歩いている助手の吉川も相槌を打つ。

ホールなのだが、外見は木々に囲まれた中に建つ豪邸か、そうでなければ信州あたりの大きなペンションといった雰囲気であった。深い三角屋根と大きな窓がたくさんあるところが音楽会場のイメージと異なっている。それらの窓は、ロビー、二つの控え

室、管理室、洗面所等にあるもので、ホールそのものは、そういった部屋に囲まれるようになっていて窓はない。控え室は練習にも使えるように二重窓になっている。

「山科さん、このホールで例の演奏会を開くということ、プランをお願いしますよ」

「素晴らしいです」

山科はさつきから

「素晴らしい」
を連発している。

「こんな素晴らしいホールコンサートを企画させていただけると、夢のようです。私自身わくわくして、アイデアが溢れ出てきます」

「それはよかった。是非お願いしますよ。誰もがあつと驚き、そして満足して家路に着くようなコンサートをね」

「ところで当然先生たちのカルテットの演奏会が、
いわゆるこけら落としになるわけですね」

山科はそうではないという返事を密かに期待しながら尋ねた。山科にしてみれば、葉羅嘉太郎があやかりたいといっていた室内楽の殿堂ヴィグモアホールのこけら落としが、当時随一の名バイオリニストであるベルギーのイザイト、同様に超絶技巧のピアニストとして知られるブゾーニという二人の大家を

招いて行われたことを知っている。知っているとい
うより、葉羅嘉太郎が建設中に何度か山科にヴィグ
モアホールのことをいったので、調べたのである。
イザイとブゾーニといへば二人とも演奏家、作曲家
として音楽史に名を残している大家である。このホ
ールを腕前がどうであれアマチュアの道楽の場とす
るのならいざ知らず、葉羅嘉太郎がいうようにこの
街の、いや日本の室内楽の殿堂にしようとするのな

ら、潤沢な資金に物をいわせて現代世界最高の室内
楽奏者を呼ぶくらいのことをしてもいいのではない
かと山科はひそかに思っているのである。

嘉太郎も、もちろんヴィグモアホールのこけら落
としのことは知っていた。しかし、自分たちの演奏
でホールの幕を開けたいという気持ちも強かった。
嘉太郎とて、どう逆立ちしてみても自分たちの演奏
が世間の耳目を集めるようなこけら落としのイベン

トにふさわしいものでないことくらいは承知している。とはいっても世界的な室内楽団を呼んでこけら落としを華々しくするというのは、常識的過ぎて面白くないと思うのである。

嘉太郎は自分を納得させるために何日も考えた挙句、ひとつの妥協案を考え出した。それは、本当のこけら落としの公演は世界的な室内楽団を招聘して行うが、その前に関係者を招いた非公開の会場披露、

いわゆる内覧会のようなものを開き、そこでのレセプションとして自分たちのカルテットが演奏するというものであつた。しかし、その内覧会の方もミュージック・プロデュースによつて、本番のこけら落としと同じようなものにするといふのである。

この案は公演の専門家である山科を納得させただけでなく、ミュージック・プロデュースとしては世界の一流演奏家による公演の前に予行演習が出来る

のだからむしろ歓迎であつた。ただホール披露の会に招く関係者たちに、最初に一流の音でホールの響きを聞かせられないのが少し残念であつた。

「それは素晴らしいアイデアだと思います。それでいきましよう。ところでホールの名前は決まつているのですか」

ときかれて、嘉太郎は山科たちを玄関に連れて行つた。

そこには両開きの広い扉の上に布で覆われた部分があつた。嘉太郎は点検作業をしていた太陽建設の職員を呼んだ。職員は脚立を持ってきて覆っている布を一部はぐつて見せた。『望巖カルテットハウス』と唐草模様周囲を飾られた浮き彫りの文字が現れた。望巖とは海の向こうに巖島を望むところから来ている。嘉太郎自慢の命名であつた。嘉太郎はこういうことを誰にも相談せずひとり決めてしまふ。

自分が温めてきたアイデアに雑音が紛れ込むことを嫌うのであった。

「素晴らしい」

と山科は海の向こうにくつきりと見えている均整の取れた美しい形の巖島をしばらく眺めていた。そして、

「先生のことですからこけら落としの出演者、もう頭の中にあるのでしよう」

ときいた。

「もちろんだ。ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団だよ。ちょうど十月の初めから約二週間国内の各地を回る。そのスケジュールの中に押し込められないか招聘元に問い合わせている。具体的な運営はお宅がすることもいつてある。日程的に可能かどうかということになったら、早速動いてください」

何事も、葉羅嘉太郎は自分で決めた後で、実行を

それぞれの専門の立場に委ねる。それならそれで、初めから専門家同士で話した方が何かとスムーズなのだが、とにかくまずは自分で決めないと気がすまない。しかし、ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団といえはいまやYBSQと書けば音楽通にはわかる世界最高といわれる弦楽四重奏団である。そのような演奏団体の公演をプロデュースできることは山科にとっても大いなるやりがいである。内心の興奮を

抑えきれないで、

「十月の初めだったらいまから一か月少々です。準備期間としては短かすぎますが、そんなことをいっている場合ではないと思います。この山科全力でそのこけら落とし公演を必ず成功に導きます。それだけでなくそれに続くその後の公演もどんどん企画しましょう」と、声を上ずらせた。

その意気込みを、嘉太郎は嬉しく思ったが、もとはといえは自分たちの演奏の場を作ったつもりもあつたので、山科のいうように次々と室内楽界注目の公演が並んだら、自分たちが入り込む隙間なんかなくなつてしまふと、少し複雑な思ひであつた。しかしヴィグモアホールのように年間四百公演以上もこなそうと思えば、おそらく山科の想定を超える公演数だらうから、自分たちが使えなくなるくらいのこと

とは覚悟しなくてはならない。いつそのこと庭の隅に自分たちのための小さなサブホールでも作るかと想像して、葉羅嘉太郎は苦笑した。

山科たちにホールを見せてから間もなく、YBS Qの招聘元から、

「条件さえ合えばスケジューリングは十月七日、八日、十三日のいずれかに御地で彼らが演奏することが可

能です。早急に具体的な打ち合わせをいたしましよ
う」

という返事が来た。

葉羅嘉太郎はすぐに山科と連絡を取ると、アポイ
ントの取れた翌日午後、招聘元である東京の《平成
アーツ》の事務所を訪ねた。南青山の一流企業の事
務所がいくつも入ったビルの七階の一室であつた。
事務所は広くはないが整然としていて、数名の職員

が落ち着いた雰囲気の中で仕事をしている。応対したのは国重といういかにもベテランらしく自信に満ちた中年の男だった。嘉太郎が電話でYBSQのこ
とを問い合わせたとき応対したのは女性の事務員だ
ったが、今回担当するのはこの国重らしい。挨拶と
お互いの自己紹介がすんだあと、事務所を見渡しな
がら嘉太郎が聞いた、

「御社が招聘する海外からの演奏家はずいぶんたく

さんあると思うのですが、これだけのスタッフでやっていらつしやるのですか」

国重が軽く笑顔を作つて答えた。

「社員は全部で百人近くおりますが、ほとんどは公演中のアーティストに同行しているか、招聘する予定のアーティストや、招聘可能なアーティストとの交渉や打ち合わせに現地で当たっております。幾ら地球が小さくなつたといつても、何年も先までスケ

ジュールの詰まっているようなアーティストにとっては、日本はある程度まとまった時間が必要な遠い国なんですよ。もちろん稀には、とんぼ返りするよ
うなスケジュールで来日するケースもありますが、
それでは我々にとって利の薄い仕事になつてしま
いますからね。それに主催者様にとつても当然割高に
なります。その点今度のYBSQのように日程的に
は迫っていてご準備が大変かと思いますが、決して

ギヤラの安くない出演者の受け入れを即決していた
だいた葉羅さんの場合は、私どもにとつては大変あ
りがたいことです。そのギヤラのせいで、当初考え
たほど受け入れ先が多くなかったことも幸いして、
スケジュールが取れました」

国重はここまで一気に喋って言葉を切った。山科
が早速本題に入った。

「日程は、三箇所提案されていますが、我々として

は最後の十月十三日というのがありがたいのですが、それでよろしいでしょうか」

「もちろんです。では日程は十月十三日ということ。十三日は休日ですが、連中は昼と夜のどちらでも可能ですがどうされますか。昼の場合は前泊、夜の場合は公演後の宿泊となります。特にパーティとかがなければ、我々の指定するホテルということ、一公演のギャラは今回の場合百八十万。小規模ホー

ルの場合は割高になります。それに宿泊費として一泊について二十万の計二百万になります。これには当方の経費なども含まれております。宿泊や食事の手配は、私どもの同行職員がすべてしますのでご心配ありません。ただし、演奏者を出席させるパーティなどをお考えの場合は拘束料として若干見ていただくことになると思います。尚それについてはどのような会かによつて、出演者の意向もあるので一様

ではありません。ヨーロッパの演奏者の場合、パーティの出席に拘束料を請求する方は少ないと聞いております。むしろ演奏を聴かれた人たちと歓談することを楽しみにされている一流演奏家もたくさんいらっしゃるやいます。演奏後ロビーなどで行うサイン会の場合は、当人たちさえオーケーすれば、費用には関係ありません」

それには葉羅嘉太郎が答えた。

「十三日は昼間のコンサートということでお願ひします。二泊していただくことになりましたが演奏後のパーティもやりたいと思います」

「わかりました。それでしたら彼らは、前日は福岡でコンサートを行って夜遅く広島に宿に入りますが、十四日はいまのところオフになっていますので、ゆっくりした気分でパーティに参加できるでしょう」

打ち合わせは、具体的かつざっくばらんな空気の

中で行われた。帰りの新幹線でも、山科と嘉太郎は内容を詰めた。

「二百万となると、入場料は最低でも七千円は必要ですね。弦楽四重奏でそれ以上というのもどうかと思いますしね。百八十席が埋まって百二十万ちよつと。それでもギャラの半分強にしかありません。チラシやポスターその他の宣伝費と、当日の運営費、それに多少は私どもの費用も見ていただくとしたら、

どうしたらいいですかね。それに内覧披露の会の経費もありますね」

「それらすべて含めて幾らかかるのかね」

「すべてに先生のおっしゃるような最高のものでいくとすれば三百から三百五十でしょうかね」

「ミュージック・プロデュースさんも最高の利益を得るわけですね」

葉羅は冗談ぽくいった。

「とんでもありません。私どもはこのこけら落とし公演は、儲けよりも公演そのものの成功を願っております。そのためには利益度外視さえも視野に入れる覚悟です」

「ぜひそう願いたいです。なにしろ今後の望巖ホルの命運がかかっていますからね」

しばらく話が途切れたあと、葉羅がぽつりといった。「望巖カルテットハウスの演奏会は、世界レベルの

ものを非常に安い入場料で聞けるといふコンセプトでいきたいんだよ。少なくとも自主公演はね」
居眠りしかけていた山科が、聞き返した。

「先生がお考えの、『非常に安い』というのはどれくらいなのですか？」

「うーん、二千円かな。それならいい音楽はたくさん聞きたいが財布が気になつて、なかなか出かけられないという人でもかなり来てくれるんじゃないか

な」

山科は、金銭感覚が庶民とはかけ離れていると思つていた葉羅嘉太郎が意外に現実的な判断をしたことに少し驚いた。

考えてみると、医者には金持ちという世間常識はあるが、その勤務振りは過酷だし、一人一人の患者から得る診察料や治療費のほとんどは高額ではない。はら病院はけっして一部の選ばれたものための高

級病院などではなく、待合室には赤ん坊を背負い両手に小さな子の手を引いた若いお母さんや、年金暮らしと見える老人たちでひしめいている。院長になってからはともかく、葉羅嘉太郎一代で現在の病院にまで押し上げるには、そのような患者一人一人を自ら診察し続けてきたはずなのである。庶民とかけ離れているというのは、安易な世間常識を鵜呑みにした考えであることに山科は気がついた。そして独

り言のようにつぶやいた。

「二千円だったら三十六万。費用の十分の一ですよ」
「不足分は私が出す。こんどのYBSQは二千円で
いこう」

葉羅嘉太郎は自分のこの思い付きにもわくわくするのだった。必ずしも豊かでない音楽愛好家へのサービスにわくわくしたのではない。このような企画を継続するうちに、世界の一流アーティストたちの

間で、望巖ホールで演奏すること、真に優れた演奏を低料金で広く提供することが一つのステータスになるだろうと思つてわくわくしたのである。そんなことになる可能性は高くはないかも知れない。だがアメリカの企業家の間では、文化的なことへの寄付が一種のステータスシンボルになつてゐるといふではないか。可能性がないとはいいきれないだろうと嘉太郎は考えていた。

「だから」

嘉太郎は、山科に語りかけるようにいった。

「コンサートの演奏は最高のものでなければならぬ
いが、それ以外のサービスは、心に通じる良いもの
にはするが、贅沢さや、必要以上の過剰サービスは
無しにしよう」

静かに話す葉羅嘉太郎の言葉に、山科も同感であった。ミュージック・プロデュースとしても、当面

は葉羅の潤沢な資金のバックアップがあれば、いまどきの『親方、日の丸』よりも安心である。しかし一公演に三百万近く私費を出したら、如何に葉羅嘉太郎が裕福でもそんなことが続くはずはない。世に安価を売りにした演奏会は少なくないが、自治体やスポンサーの補助がある場合でないと、結局はそれなりの出演者ということになっている。もちろんそうした出演者たちの心のこもった演奏で、評判のシ

リーズも少なくなる。しかし、世界の一流を呼び続けることが出来るのか。

それはともかくとして、とにかくYBSQによるこけら落としと、それに先立つ葉羅嘉太郎自身が演奏者の一人であるアマチュアの弦楽四重奏団による非公開の会場披露の会を成功させることである。YBSQ公演が十月十三日の日曜日に決まったことで、披露の会をその一週間前十月六日の日曜日にするこ

とに決めた。

忙しくなる。

こけら落とし

出来上がったばかりの室内楽ホールでの演奏会の

時は瞬く間に迫つてきた。

葉羅嘉太郎たちの四重奏団の練習は、普段は月に一回か多くても二月に三回程程度であつたが、望巖ホールでの披露演奏会が決まつてからは、毎日のように集まつて、文字通り猛練習を行つてきた。

ここでこのアマチュアの弦楽四重奏団について触れておこう。ファースト・バイオリンが葉羅嘉太郎、

セカンド・バイオリンが町田里子、ビオラが葉羅嘉子、チェロが熊本匡であることはすでに書いた。四人とも仕事はリタイアして、充実した余生をおくろうと室内楽に賭けているといつていい。

十月六日の演奏会では、一晩のプログラムを自分たちだけで埋めなくてはならないのでモーツァルトの第四番ハ長調、ハイドンの《ひばり》ニ長調それにベートーヴェンの第四番ハ短調の三曲を弾く。三

曲ともこれまでに発表会などでとりあげているので一応弾けるものばかりであるが、一晩で三曲というのは彼らにとつては経験がなく、やはり負担である。また聴きに来るであろう客が、いつもの彼らの聞き手とは違う。これまでだとごく僅かな近所の人や家族かせいぜいアマチュアの音楽仲間くらいであった。しかし今度はそういつたいつもの聞き手も来るだろうが、ホールの披露が目的であるから、音楽関係者、

音楽プロデューサー関係のもの、プロの演奏家、評論家、報道関係者そのほかこれから先このホールを利用することが考えられる人たちに招待状を送ることになっていゝる。招待状を送つた全員が来ることはなくとも、ホールが完成間近になつたころ新聞の地方版やテレビのローカルニュースでも報道されたから、それなりに人は集まるだらう。それで連日の猛練習となつたのである。練習をしながら本番の日が

一日近付くごとに彼らの緊張度はワンランクずつ高まっていたのだった。

練習は回を重ねるとかえって不具合な箇所が見つかり、彼らだけの力ではどう解決したらよいかわからなくなってきた。本番まで二週間を切ったころ、嘉子の提案で誰か室内楽経験の豊かな先生のレッスンを受けようということになった。

先生はすぐに見つかった。地元のプロ・オーケス

トラのメンバーで、仲間と定期的に弦楽四重奏のコンサートを開いている鈴鹿美鈴という美しい名前の女性バイオリニストだ。葉羅たちも彼女の主催する弦楽四重奏の演奏会には毎回聴きにいつているので、顔はよく知っている。

レッスンの初日、約束の午後一時半の五分前に鈴鹿美鈴は葉羅の家のチャイムを鳴らした。その日葉羅たちは朝から練習をして、昼食をはさんで午後の

練習を始めたばかりであつた。鈴鹿は、練習室に入つてくるなり、

「いま、外からもいい音が聞こえていましたよ」と挨拶した。一通り自己紹介などが終わると早速レッスンが始まつた。鈴鹿美鈴は四十前後だと思つたが演奏している姿を客席から見ると若く美しく見えた。舞台上で見る鈴鹿はとても固い表情をしていて、嘉太郎は無愛想な人のように思つていた。だからレ

ツスンの先生の人選を話し合つたとき、もつと楽し
そうな人がいいという意見が出ていたくらいだ。し
かし、このさい大切なのは室内楽に対する見識とセ
ンス、演奏技術の高さだということ、結局鈴鹿に
頼むことが決まつたのだつた。

最初に鈴鹿美鈴は、この度本番で演奏する予定の
三曲すべてを通して演奏するよう求めた。それだけ
で一時間ちよつとかかつた。ここで一旦小休止を取

つて、鈴鹿はこれから二週間足らずの限られた期間にすべきことを話し合うというのだ。いまラフな服装でリラックスした笑顔を絶やさないうで話す鈴鹿は、予想とはまったく違っていた。演奏しているメンバ―がみな六十以上の年寄りということもあるのか、言葉遣いも比較的優しい感じであつた。

「この僅かな期間に、私に出来ることは限られています」

と前置きしてから、とにかく自分としては出来るだけのことをするので、信頼してついてきて下さいと
いった。いくつか感想をいったあと、すぐにレッス
ンの続きが始まった。レッスンは三曲の中では最も
内容の濃いベートーヴェンからであった。というよ
り時間的に見てこの日はベートーヴェンだけしかで
きないということでもあった。

鈴鹿がこの四重奏団の実態をすぐに的確に把握し

ていることはアドバイスの内容から読み取れた。

まず彼女が求めたのは、どの曲についてもテンポを葉羅たちが弾いて見せたよりもワンランク遅くしてすべてのフレーズを確実に弾くということであった。それは速く弾くように指定された楽章はもちろんだが、ゆっくりの楽章もそうすることによつてよりニュアンスをこめることができるというのだ。そしてもう一点は音程のことであつた。鈴鹿によると、

葉羅たちが出した音はほとんど全部といつていいくらい濁っているという。葉羅自身も常日頃からもつときれいな響きにすべきだとは思っていたが、それはところどころグシヤツと汚い和音が鳴るのを何とかしたいということだった。しかし、鈴鹿がいうところによると、ところどころではなく

「すべての音」

が濁っているというのだ。

弦楽四重奏の音程をよくするというのは大変なことでだとよくいわれる。練習のとき葉羅はよく、弦楽四重奏団の歴史に燦然と輝くブダペスト弦楽四重奏団でさえ音程のことでは喧嘩が絶えなかったというエピソードを例に出すのだった。だから

「大変でも頑張ろう」

というわけだが、実際に改善の成果が上がることはなかった。四重奏では三人がそこそこ正しい音程で

弾いても一人が違っていれば和音は濁ってしまふ。また別の箇所ではさつき濁らせた人は正しく弾いても、残りの三人の中の誰かが濁らせるような音を出してしまふといったぐあいだ、なかなか四人がぴたりと揃う瞬間は来ないものだ。もちろん四人それぞれがぴったりでない音程で弾いてしまふことも少なくない。さらに各自の音程がたまたまそろつても、バランスや音色がハーモニー感を損ねることもある。

この問題は気の遠くなるような課題である。それに、一度きれいな響きが出来たとしても、次にやったときにも同じようにきれいになる保障は何もない。だからといって音程に対する努力はしても無駄だというわけではなく、賽の河原のような努力でも根気よくやっっていれば少しずつはましになっていく。このことを長年の経験でよく知っているので、葉羅たちも努力してはいるが、まだ目に見えるほどの結果は

出ていないのである。それは本当に根気の要る練習で、合奏のときだけでなく、各自の個人練習でも根気の要る取り組みが必要であり、しかも成果は薄紙を貼り重ねるほども見えてこない。だからアマチュアのカルテットではつい疎かになりがちなので、より成果が目に見える、弾けないところの練習や、タッピングが合わないところの練習に時間をとることになるのである。

なお、ブダペスト四重奏団の名誉のためにいって
おくが、彼らが音程のことで喧嘩になるといふのは、
葉羅たちの

「音程が悪い」

というのとは意味が違う。音程についていい出せば
平均律だ、純正律だ、ピタゴラス音律、中全音律等々
一冊の本が書けるほど奥が深く、また答えがないよ
うなむつかしさがある。彼らの場合、曲の中のそれ

ぞれの場所でどのような音程を取るべきか、そこでは誰の音に合わせるべきかが問題になるのであつて、葉羅たちのように弦を押さえる指が思ったところに落ちずに曖昧な音程になつてしまふというのはまったく違ふのである。平均律に調律されたピアノが入った室内楽の場合と違つて、弦だけのアンサンブルではどんな音程でも出せるだけに選択の幅があつて難しさがますのである。

鈴鹿美鈴の指示でテンポを落としたことで、適当にごまかして通り過ぎていた速いフレーズが少しすつきりした。しかし音程の方は目立った改善は見られない。鈴鹿は、冒頭と終止音だけは正しい和音で弾けるように頑張りなさいというが、それでもなかなかきれいに響く確率は高まらない。嘉太郎たちの耳には上手くいったと思っても、鈴鹿美鈴の耳には濁って聞こえるらしく、

「うーん、もう少しね」

としかいってもらえない。

ついには鈴鹿から、今度の演奏会は二曲にしたらどうかという提案がなされた。コンサートの日までにモーツァルト、ハイドンそれにベートーヴェンの三曲を仕上げるのは無理だとの判断だ。嘉太郎は鈴鹿のこの提案を山科に伝えたところ、山科は反対した。

彼としては嘉太郎たちの演奏会を、その一週間後のYBSQの演奏会の現場実験と捕らえていたため、YBSQが三曲予定しているので嘉太郎たちにも三曲やって欲しいのだ。山科にとつては、あえていつてしまえばどつちみちたいしたことのない嘉太郎たちの演奏の質よりも、あくまでもYBSQ当日と同じような進行にして欲しいのである。開演時間も同じ十六時、十七時ころから三十分と長めの休憩を取

って、客に瀬戸内海の夕暮れを眺めながら、軽い飲み物を楽しんでもらう。演奏が終わったあとはロビ―で軽いパーティというのも同じ設定になっている。嘉太郎は、同じ三曲といっても曲が違うのだから演奏時間は違ってくるし、休憩時間に瀬戸内海の夕焼けを見てもらうことにしても、ちよつと時間を調整すれば問題ないはずだと思つたが、結局山科に押し切られた。

それに山科はもうひとつ、会場の音響に関して嘉太郎たちの演奏の録音を取ることを考えていた。今後この会場を頻繁に使うことになったときの下調べである。そのためのソースは多いほうがいい。ただし、山科としてはできることなら是非録音したいと思つたYBSQについては、本番はもちろんリハ―サルの録音も断られた。

YBSQの演奏会は一流広告代理店の製作によるチラシが大至急で作られ、あらゆるところに配られ、それまでに開かれる市内に限らず近隣のクラシック系コンサートプログラムの挟み込まれた。山科は短期間の宣伝であるからとテレビコマーションも考えたが、葉羅嘉太郎の入場料二千円というこだわりもあって、あまりにも出費が嵩むため、それは諦めざるを得なかった。しかしラジオやローカルのFM

放送などのイベント紹介コーナーでは流された。

一方、嘉太郎たちが演奏するホール披露の内覧会について送られた招待状には

「新しいホールのお披露目にオーナー自ら率いる弦楽四重奏団の演奏がアトラクションとして行われま
す」

とだけ書かれた。

嘉太郎たちの練習の仕上がり具合とは無関係に、

演奏会の日は容赦なくやつて来た。

当日の開場は、ホールを見学する時間のこととも考慮して、アトラクションと位置づけられた嘉太郎たちの演奏が始まる二時間前の十四時とされた。普通開場は開演の三十分くらい前というのが多いが、それに比べると早い。演奏者は本番の二時間前にはリハーサルを終えておかなくてはならない。おまけに招待客たちがホール中を見学して歩き回るので、控

え室などもすべて開放しておくことになっている。もちろん葉羅嘉太郎はそういった人たちの案内役もしなければならぬから、そのあとの演奏のために集中することもままならないのである。止むを得ないこととはいえ、葉羅嘉太郎は落ち着かない気分であつた。

招待客たちの出足は早かつた。特に音響設計関係

の面々は開場の十四時も待ちきれないのか、十三時前後にやつてくるものもあつた。早く来た人たちは外回りを見て回るなどして開場時間を待った。開場の十四時には望巖ホールの駐車場はほぼいっぱいになり、玄関前は百人以上の賑わいとなつていた。

彼らは十四時ちょうどに開けられた広い玄関からいっせいに建物の中に入った。たいていの人たちは中で待ち受けていた葉羅嘉太郎に挨拶をして招待の

礼をいったが、葉羅を無視してずかずかと中のほうに入つて行く者も少なくなかつた。報道関係者や音楽雑誌、建築雑誌などの取材者は、ところかまわずカメラを向ける。

ややあつてから、ミュージック・プロデュースの担当者がよく通る声で、

「では、ホールの方をご案内いたします」といって、二重になつた防音ドアを開いた。ロビー

や周辺の設備が明るく開放的で、装飾なども凝っていないのとは対照的に、ホールは重厚な落ち着いた雰囲気であつた。中に足を踏み入れたものは一様に感嘆の声を上げた。それは大きな民宿を思わせるような三角屋根の建物の外見からは想像できない雰囲気であつた。

ホールの入り口は正面のほか横に一つの二箇所である。百八十の座席に対してはこれで充分である。

あとは舞台の横に演奏者が出入りする入り口がある。舞台の高さは五十センチほどで、聴衆が演奏者を身近に感じられる高さである。舞台の広さは十数名の演奏者が入ると少し狭く感じるほどで、実際には八重奏くらいまでを想定した舞台である。

嘉太郎たちのカルテット、この団体にはまだ名前がないのだが、の嘉太郎以外の三人の演奏者はリハ

ーサルの後、車で二十分ほどの嘉太郎の自宅に行っていたが、十六時が迫ってきてふたたびホールに戻ってきた。嘉太郎も案内をほどほどに打ち切つて十六時十五分前には控え室に入った。四人は楽器を出し、思い思いに指慣らしを始めた。みな緊張のために口数が少ない。

開演五分前、山科が控え室にみなを呼びに来た。四人は無言のままチューニングをしてから廊下に出

た。舞台入り口の前で一、二分待つと、山科が

「お願いします」

と、いつて舞台へのドアを開けた。その瞬間、明るい舞台の光が四人を照らした。嘉太郎たちは眩しい舞台の光の中に進みながら、その向こうの薄暗い客席いっぱいには座っている聴衆を見た。嘉太郎たちの足音と同時に大きな拍手が沸き起こる。

葉羅嘉太郎と熊本匡の二人の男性は上下黒、ただ

し上は黒いシャツ。ネクタイはしていない。最近室内楽のコンサートで流行のスタイルである。葉羅嘉子と町田里子の女性陣は七分袖にロングスカート、ワンピース、これも黒である。四人は意識して笑顔を作りながらそれぞれの席の傍に立つと、一曲目の楽譜を手に持ったまま深々と一礼してから、椅子に座った。少なくともここまでは、おそらく来週のYBSQもほぼ同じようなものであろう。

四人は楽譜を整え、楽器を構えてファースト・バイオリンの嘉太郎のほうを見た。嘉太郎の合図で、モーツァルトのハ長調の主和音で始まるメロディがホールに流れ出した。嘉太郎たちも初めて聴く客がいつぱいに入ったホールでの音である。鈴鹿美鈴の厳しい指導の甲斐あってまずまずの和音がホールの隅々にまで届いていった。弾いている嘉太郎たちにとつてもその響きは感動的だった。嘉太郎は

しようと思えばいくらでもできたはずのホールでの練習を、この瞬間のために、今日の午前中のリハーサル以外敢えて一度もしなかつたのである。

かくして若きモーツァルトの愛らしい曲は十二分足らずで大過なく終わった。大きな拍手であつた。鈴鹿美鈴も最前列の端の方の席で盛んに拍手している。拍手をしながら、

「よしよし」

という感じで頷いている。四人は一旦舞台から下がったが、すぐ引き続いてハイドンの《ひばり》である。一曲目の好感度をそのまま残したような盛んな拍手で嘉太郎たちは迎えられた。

しかし、何とかいい感じでいけたのは一曲目だけで、二曲目の《ひばり》では冒頭の導入部で、セカンド・バイオリンとビオラの三度音程の進行はうまくいったが、それを引き継いだチェロがゆがんだ音

程で弾いてしまった。チェロの音程は同じようなフレーズが二度目に出てきたときにも不安定でその影響は、出を待っていたファースト・バイオリンの嘉太郎に伝染した。高い音でひばりのさえずりのように輝かしく歌い始めるはずのメロディは外れた音程で始まってしまったのだ。練習ではそんなことはなかったのだが、

「本番では何が起こるかわからない」

といわれる通りとなつてしまつた。その後ある程度立ち直りはしたものの、第三楽章の中間部ではファースト・バイオリンとチェロが連鎖的に出を間違えて、混沌とした中間部となつたし、プレストの第四楽章でも四人ともがいろいろな場所で指がもつれたような演奏となつた。それでも温かい拍手をもらつた。

計画通り三十分間の休憩がとられた。来場者は口

ビーで軽い飲み物を手にしてさんさんと柔らかい午後の陽が降り注ぐ瀬戸内海の眺めを満喫した。山科は来週もぜひこのように晴れて欲しいと願うのだった。

一方、嘉太郎たちが休憩後演奏したベートーヴェンは惨憺たる出来だった。《カルテットの楽しみ》というアマチュアへの室内楽の勧めを書いた名著があるが、そのなかにある

「アマチュアの出す音の八十パーセントは濁っている」

という言葉を地で行くような演奏となつた。勢いよく全曲を締めくくるユニゾンの

「ソラシド」

「ソラシド」

「ソラシド」

と三回繰り返す音さえも濁つた汚い響きとなつた。

このときも同じように拍手は来たが、

「終わってよかった、という拍手だな」

と嘉太郎は思った。型どおりにアンコールを求めるとかのように拍手は、盛大とはいえないが続いた。嘉太郎たちは丁寧にお辞儀を繰り返したがアンコールはしなかった。鈴鹿も山科も、彼らのこの判断にほっとした。

ロビーに急遽準備された立席パーティーに演奏者は四人とも出席したが、会場はホールについての話題と次週のYBSQの話題に終始し、嘉太郎たちの演奏についてはずいぶん一言も触れられることはなかった。嘉太郎は猛練習の結果がそのような状態で終わったことに無念の思いであったが、ひとつだけモーツァルトの最初の音が出たときの感動だけは何時までも忘れなかった。

パーティがお開きになつて招待客が帰り始めたとき、鈴鹿美鈴が葉羅嘉太郎のところへ近付いて来ると、辺りを見回してメンバーを手招きして集めた。そして、

「演奏は、反省点も多々あるでしょうが、練習の成果は充分に出ていたと思いますよ。これを機にさらにレベルアップされることを期待します。私でお役に立てることがあつたらいつでも声をかけてくださ

い。今日は素敵な会にお招きいただきありがとうございます。ごさいました」といってから帰っていった。

来週のYBSQの演奏会はきつと素晴らしいものになる、嘉太郎は確信した。その思いは山科も同じであった。《望巖カルテットハウス》は思ったとおりの素晴らしいホールであった。

YBSQのチケットはインターネットで販売され

たが、瞬く間に完売となり、すでに招待客を含めて百八十席は満席となっていた。ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団の名前と、全席指定で二千円という低料金がそのような結果を生んだものと思われる。

YBSQの今回の日本ツアーは、いずれも千人以上の大ホールでの公演で、五千円から八千円の料金で行われているのだから、少々遠方から申し込みがあっても不思議ではない。現に岡山や下関あたりか

らの申し込みもあつた。

十月十三日、《ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団演奏会》は満員の聴衆の熱い視線の下で行われた。YBSQメンバーもリハーサルでホールの響きを絶賛していたが、気持ちよく演奏できたのか乗りに乗った演奏であつた。ハイドン、モーツァルト、ブラームスの弦楽四重奏曲を並べたプログラムであつた

が、自らの楽団名を冠したブラームスの第二番では、この曲のこれほど美しい演奏は無いといいきれるほどの素晴らしいものであつた。

演奏後のパーティーでYBSQのメンバーは口々にホールの響きの素晴らしさを語つた。そして是非またここで演奏したいともいつた。葉羅が平成アーツの同行職員に聞いたところ、再来年秋に来日の予定があるという。葉羅嘉太郎は、具体的な日程がまだ

決まっていないうのに、山科を介して再来年のコンサートを受けることを早くも予約したのだった。

葉羅嘉太郎がアマチュアとして弦楽四重奏をやっていることを聞いたYBSQのファースト・バイオリン氏が、

「ぜひベートーヴェンの弦楽四重奏曲をするといい。それも、自分たちだけのためでもいいから後期の作品がいい。ベートーヴェンが、そして音楽というもの

がわかるから」
といつてくれたのが印象に残つた。葉羅は彼が、自らの楽団名としているブラームスの作品ではなくベートーヴェンを勧めたことに深い意味を感じるのだつた。

葉羅嘉太郎は熱狂の一週間が終わつて、どこことなく燃え尽き症候群のような気分であつた。しかし、

ミュージック・プロデュースの山科たちは、望巖カ
ルテットハウスに関する仕事で忙しい毎日であつた。
YBSQ公演の大成功のあと、翌週には二つのコン
サートが入っていた。ひとつはカルテット活動を続
けている、地元オーケストラの鈴鹿美鈴を含むメン
バーによるコンサート、もう一つはピアノ・トリオ
のコンサートである。鈴鹿美鈴たちのコンサートは、
縁のある鈴鹿美鈴たちに是非ここを使って欲しいと

申し出て実現したものだ。嘉太郎はむしろ後者の方を非常に楽しみにしていた。自主公演ではないが、ホールの使用料が他よりも安い。ため入場料は三千円と、この出演メンバーにしては安く設定されている。葉羅嘉太郎がこの公演を楽しみにしているのは、出演する女性ピアニストのためである。嘉太郎は彼女のことを、弦楽器とピアノのための室内楽を弾かせたら世界で五指に入る室内楽ピアニストと評価し

ているからである。ヨーロッパを活動の拠点として
いる日本人ピアニスト山根倫子である。今回は共演
者も世界的に活躍している日本人たちで、シューベ
ルトのピアノ・トリオを中心としたコンサートであ
る。

葉羅がこの演奏会に期待するもう一つの理由はピ
アノそのものである。葉羅はホール備え付けのピア
ノとしてヤマハでもスタインウェイでもなくファツ

イオリのフルコンサートを入れた。いうまでもなく
ファツイオリはスタインウェイを凌駕することを目
的に一九八〇年代に製造を始めたイタリアの新しい
ピアノ・メーカーである。まだ世に出た製品の数は千
数百台と、世界中のあらゆるホールというホールに
備えられているスタインウェイに比べるとまったく
取るに足らない数であるが、徐々にその価値は認め
られつつある。

山根倫子は、もちろんファツイオリの存在は知っていたが弾くのは初めてだった。彼女は、リハーサルに現れて最初にピアノに触れた瞬間、驚嘆の声を上げた。弦楽器のような繊細なピアノニツシモがホルの隅々に広がっていく。山根はこのピアノに一目惚れしたかのように夢中になって、いろいろなフレーズを試し弾きした。それを弦楽器の奏者たちが準備をしてそれぞれの席についてもなかなかやめず、

ついにはバイオリン奏者にリハーサルを始めましよ
うと催促されたほどだった。

ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトのピア
ノ・トリオというプログラムであつたが、これを聴
いた葉羅嘉太郎は音楽したいという気持ちから自分の
内部に湧き出すのを感じた。燃え尽き症候群から立
ち直り始めたのだ。

このトリオのコンサートには、嘉太郎にとって嬉

しい波及効果が付いてきた。コンサートを聴いたあのプロのピアニストが、自分もファツィオリが弾きたいといつて望巖カルテットハウスでリサイタルを開くことにしたのだった。山根と同じフランスで活動している広島出身のピアニストである。ピアノのためにこの会場が選ばれたのであつた。

ホイツト教授のレッスン

葉羅嘉太郎たちはカルテットの練習を再開した。

三月に一度くらいのパースで鈴鹿美鈴のレッスンを受けることにもした。しかし二回目の発表会を望厳カルテットハウスでする機会はなかなかやっつてこなかった。それどころかメンバーで発表会を口にするものは誰もいなかった。

もとはといえ、望巖カルテットハウスは、自分たちの定期的な演奏会を夢見て建てたものだ。それが瞬く間に国内外の名演奏家たちの活動の場となったが、しかしそのために自分たちの日程がとれないわけではない。あまりにも見劣りする演奏会をそこですることが躊躇されたのである。望巖カルテットハウスが素晴らしい室内楽専用ホールとして認められ、優れた室内楽団が利用するようになることは、嘉太

郎の夢の一つではあつたのだが、夢の中心であつたはずの自分たちの演奏活動はすっかり萎んでしまつていた。

演奏の方も、鈴鹿美鈴の指導を定期的に受けてはいるが、取り立てていうほどの進歩は見られない。ときどき嘉太郎は、バイオリンを弾くのはやめてホールを室内楽の殿堂として、その名を世界に広めるための活動に専念しようかと思ふことさえあつた。

結局、葉羅たちは地元の公民館のホールと称する大部屋で、望巖カルテットハウスでのホール披露のアトラクションとして行った演奏会以来の発表会をすることにした。ホールもそうだが、嘉太郎の夢とも空想ともつかない超一流の設定の中で開く演奏会とはおよそかけ離れた形の発表会であった。チラシはパソコンで作った、それもまったく飾り気のないA四版一枚の案内プリントを二十枚くらい当の公民

館のチラシ棚に置くだけであつた。

かつて嘉太郎から夢のような話を持ちかけられたミュージック・プロデュースの山科は、このことに何も口を挟まなかつた。せつかくホールを持っているのだから、そこで発表会をしたらどうかともいわなかつた。山科としては、望巖カルテットハウスを日本のヴィグモアホールにするという葉羅のもう一つの夢の方にかけていたのである。そのためには、

望巖カルテットハウスでは一流の演奏しかしないということを世間に知らしめる必要があると考えていた。つまり望巖カルテットハウスに出演する演奏家は一流だという、演奏家にとつてのステータスを定着させたいと思つていたのである。

公民館での葉羅たちのカルテットの発表会は、数名の近親者や知人とチラシに書かれた立派な曲名に釣られて迷い込んだ全部で二十人にも満たない聞き

手を前に行われた。だがその発表会には、鈴鹿美鈴がよく認められたものだと思われるようなプログラムが含まれていた。ベートーヴェンの後期の弦楽四重奏曲である。あのYBSQのメンバーがパーティで葉羅にいった言葉を実践したかったのである。確かに練習の段階では、

「これがベートーヴェンだ」

「これが音楽なんだ」

と感じる場面も少なからずあった。しかし本番は惨憺たる出来で、五十ばかり並べたパイプ椅子にパラパラと座っている客席から、よくブーイングが出た。途中で帰っていく人がいなかったと思うくらいであった。鈴鹿美鈴は聞きに来ていなかった。別に来たくなかったからというわけではなく、その日オーストラリアの仕事が重なっていたからだ。本人はちやうど仕事が多忙な状態に陥っていたかと思つたかも

しれない。

山科も来ていなかった。彼は望巖カルテットハウスの仕事で忙殺されていて、それどころではなかったのだが、かといって嘉太郎たちの本番の時間に顔を出せなかったわけではなかった。しかし、顔を出さなかった。嘉太郎はそれらのことはまったく気にしていなかった。彼もまた山科と同じように、自分たちの演奏のために建てたホールではあるが、いま

や一流の室内楽ホールとして一人歩きを始めたホールを自分たちの演奏で汚すことは出来ないと考えていたのである。また自分たちの演奏のために他人の貴重な時間を奪うことは出来ないとも考えていた。もしその人たちが室内楽を聞きたいのだったら望巖カルテットハウスで優れた演奏を聞くことに時間を費やすべきだと思ふのであつた。

では、なぜ発表会をするのか。それは嘉太郎にも

よくわからなかつた。確かに嘉太郎が専用ホール建設の夢を見たときには、すべて一流の設定の下に周到に準備され、満員の聴衆が固唾を吞んで聴き入る中で演奏する自分たちの姿を夢想した。しかしそれはもちろん現実の姿としてはありえないことだ。では嘉太郎はいい年をして、音楽の世界での英雄的な存在に憧れてそれに自分を当てはめて見ただけなのか。まあそれに近いといつても間違ひではない。し

かし、まったく同じでないことも確かである。それは音楽の演奏という行為そのものが、世に存在する優れた音楽作品を実際の音にして聴くものに差し出すということを意味しているからである。差し出すべき相手がいないというのは、演奏としては不完全な形である。演奏する自分たち自身が聴き手であるという面もありはする。演奏者は、作曲者ではないがやはり創造者としての側面も持っている。聴く人

の賞賛が目的ではなく、聴く人たちの心に届くことが大切なのである。嘉太郎は、ベートーヴェンの『莊嚴ミサ曲』の中の一曲の冒頭に書かれている『心より出ずる、願わくは再び心に至らんことを』という言葉を思っているのである。

だから、公民館の数人の聴き手でもまったく構わないのだ。嘉太郎はそこまで考えたとき、自分たちが演奏するためのホールを建て、一流の音楽プロデ

ユース会社に演奏会の場をセットさせてそこで自分たちが弾くという夢は、望巖カルテットハウスの実現には役立ったがそれ以外の何ものでもなかったことに気付いた。嘉太郎はこれでいいのだと思った。

嘉太郎の腹の中では、別の思い付きが疼き始めた。カルテットの四人でヨーロッパに出かけて、何日か滞在して弦楽四重奏のレッスンをしかるべき先生に

ついて受けるというのだ。しかるべき先生は、現役でなくてもいいが少なくともかつて優れた弦楽四重奏団で活躍していたがいまは後進の指導に当たっているといった先生がいい。鈴鹿美鈴先生もいい先生だが、音程やタイミング合わせなど技術的なことの指導は根気よくしてくれているが、音楽の目的ともいえる『心より出ずる、願わくは再び心に至らんことを』という点では、あまり指導されていないと嘉

太郎は感じていた。もちろん聴き手の『心に至る』ためには音程が正しくなければならぬし、四人のリズムやタイミングも合わないと言えない。しかし、音程が正しくても、タイミングがぴったりでも心に響かない演奏は世に満ちている。

葉羅嘉太郎は、平成アーツの国重に電話して、アマチュアのカルテットのレッスンを受け入れてくれ

るしかるべき先生を紹介してくれないかと頼んだ。平成アーツはYBSQの演奏会で葉羅嘉太郎と望巖カルテットハウスには好印象を持っていたし、二年後のYBSQの望巖カルテットハウスでの公演も決まっている。早速、一流演奏家たちに顔の広いヨーロッパにいる職員に当たらせることを引き受けてくれた。

平成アーツの国重からの返事は思ったより早く来

た。はじめYBSQにどうかと聞いたらしいが、

「出来れば是非お引き受けしたいが、あいにく時間がまったくない」

と断られた。そして、かつてドイツの有名なホイット弦楽四重奏団を主宰していたホイット教授に了解を取り付けてくれた。ホイット教授は、四重奏団が団員の高齢化で引退したあと、教授自身も高齢ということだが、ウィーンで後進の指導に当たっている

というのだ。

嘉太郎はホイツト弦楽四重奏団のことはよく知っていた。嘉太郎の膨大な室内楽のレコードのコレクションにも何枚か彼らの録音がある。特にモーツァルトの弦楽五重奏曲の録音は、その曲のレコードやCDでこれ以上の演奏は無いと常々友人に語っている。そのホイツト教授と聞いて嘉太郎は喜んだ。教授は英語でレツスンするということだが、チェロの

熊本匡が英語に堪能だから言葉の点は問題ない。

嘉太郎たちは早速渡欧の日程などを決め、この話が湧き上がってから一か月後にはホイツト教授の門を叩いたのである。相変わらず嘉太郎は思いついてから実行するまでのテンポが早い。もちろんその一か月の間に、鈴鹿先生の特訓を受けたことはいうまでもない。

『心より出ずる、願わくは再び心に至らんことを』

の真髓の一端でも得て帰ろうというのが嘉太郎たちのヨーロッパでのレッスンの目的である。レッスンを受ける曲は、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第七番の第三楽章にした。しかしこれは明らかに背伸びしすぎた選曲である。案の定鈴鹿美鈴は、あまりにも荷が勝っているからと行って、先日望巖カルテットハウスで弾いた同じベートーヴェンの第四番の中からどの楽章かを選んだらどうかと提案した。しか

し第四番には『心から出ずる……』というのにぴ
つたりの、ベートーヴェンならではの崇高な楽章が
ない。四番は楽章構成が特殊でゆっくりの楽章がな
いのだ。嘉太郎たちはまず音程の点で苦勞すること
を覚悟の上で敢えて選曲をしたのだった。それなら
しかたないといった感じで首をひねりながらも、美
鈴は特訓を引き受けた。一か月弱の特訓期間のほと
んどが音程のことに費やされた。おかげで多少はそ

れぞれが弾くメロデイがそれらしく聞こえるようになっていった。

最後になって鈴鹿美鈴からサプライズ発言があった。今度のウィーン行きに同行させてほしいというのだ。その間オーケストラの仕事は休むという。美鈴は、いい出したときにはもう決めていたのだった。ビザまで用意したというではないか。自らカルテットをやっている彼女もホイット教授のレッスンを聞

いて千載一遇のチャンスと思つたのである。このことは、それまで音程や細かい合わせばかり突付いていると思つていた嘉太郎にとっては、美鈴を見直すきっかけになる。

ホイツト教授は大先生であるにもかかわらず、打ち解けた雰囲気で嘉太郎たち五人を迎えた。レッスンに入る前に今回嘉太郎たちがどうしてわざわざ遠

い日本から来たのかを聞いた。熊本匡の通訳で話は進んだ。ときどき鈴鹿美鈴が補足した。ジュリアー
ド音楽院に留学の経験がある彼女も英語は自由自在
なのだ。教授は静かに話を聞いていたが、大きく頷
き、

「それは素晴らしいことだ。では皆さんの音楽を聴
かせてください」

と、嘉太郎たちに準備を促し、教授自身も長

年使つてきたと見えるバイオリンを出した。そして
鈴鹿美鈴もバイオリンを出したのだった。

「何を弾きますか」

と教授が聞いた。

「ベートーヴェンの第七番のアダージョを弾きま
す」

と嘉太郎が答えた。それくらいなら英語でいえる。
それを聞いた教授が、

「あなたたちはアマチュアですよね」と聞き返した。

嘉太郎は、一瞬アマチュアには無理な曲だといわれるのかと思つて身構えた。だが教授は、「素晴らしい選曲です。では聞かせてください」といつて演奏を促した。

嘉太郎たちはホツとして、楽器を構えた。最初に一人で音を出す町田里子の弓が少し震えた。それは

すぐにみんなが加わって落ち着きを取り戻した。鈴鹿美鈴の特訓のおかげでまあまあの音程で演奏が始まって、八小節まで進んだときにホイット教授が演奏を止めた。ファースト・バイオリンの嘉太郎の弾くメロディが一段落して、今度はチェロの熊本匡が同じメロディを一オクターブ低い音で弾き始めようとしたところだった。教授はまさに弾き始めようとして身構えたチェロの熊本に、

「ちよつと失礼」

というような仕草をしてから、

「三人の伴奏はとてもよかつたが肝心のファースト・バイオリンの歌い方が違います」

と、いって嘉太郎に近付き、

「正しい音程で弾こうとばかりしていませんでしたか」

と聞いた。そして、

「あなたはよく練習できているので、音程のことは心配しなくても大丈夫です。だからあなたは心に感じたままにこの美しいメロディが楽器から出ているかということだけを考えて弾きなさい」といった。

「あなたの楽器は素晴らしい音を持っていますよ」ともいった。四人は初めからもう一度弾いた。しかし同じところで演奏を止めて、教授はそれでは同じ

だといつて、首を横に振った。嘉太郎自身にしてみれば教授にいわれたことを踏まえて、一回目よりもずっと心を込めて弾いたつもりだった。ホイット教授は、後ろの椅子で楽器を手に腰掛けて、レッスンのようすを見ていた鈴鹿美鈴に向かって、
「今度はミスズ、あなたが弾いてみなさい」と促した。

世界的な大先生に比べればものの数ではないかも

しれないが、一応嘉太郎たちの先生であり、プロ・オーケストラの奏者である。教授の促し方は、まるで横で待っているもう一人の生徒のような感じだったので、嘉太郎たちは鈴鹿美鈴の反応を少し心配した。しかし、鈴鹿はそのような心配をよそに、まさにもう一人の生徒のように

「はい」

と行ってファースト・バイオリンの席に來た。嘉太

郎は鈴鹿のために席を譲った。同じ箇所が弾かれた。さすがに鈴鹿美鈴の音は嘉太郎に比べるとしつかりと楽器が鳴っている感じで美しい。音程も、そこそこ正しく弾いていたと思える嘉太郎の演奏よりもさらに安定している。嘉太郎たちは、彼女がこんなに真剣に弾いたのをレッスンの中では聞いたことがなかった。これなら教授はきつと褒めるだろうとみんなは思った。八小節までで演奏は一旦止まって、

教授の言葉を待った。

「ミスズ、あなたはヨシタロウよりもさらに美しく弾きました。でもそれでは聴く人の心は打ちません」

教授の言葉に妥協はない。美鈴は生徒の前で真剣に弾いたただ一節のメロディを生徒と同じように否定されたわけだが、悪びれることなく教授の続く言葉を待った。

「あなたの技術があれば、あなたが弾きたいと思う

とおりに弾くことが出来るはずです。ミスズの心を出してごらんなさい」。

美鈴も嘉太郎と同じことをいわれたのだ。美鈴は二度目の挑戦をした。真剣そのものである。しかし今度も、一回目と同じ理由で否定された。そして、

「これは確かに深刻で悲しみを湛えた音楽ですが、堅苦しい音楽ではないですね。あなたの演奏は、ヨシタロウの演奏もそうでしたが、堅苦しいだけです。」

音楽が持っているものだけをあなたの感性で汲み取って、私に届けてください」

美鈴は、この言葉の意味がよく理解できた。しかし、これまでの二回も自分としては充分に音楽の美しさを表そうとして弾いたつもりである。それ以上どうしろというのだろうか。このまま三回目を弾いても変らないだろうと思うと、弾けなくなってしまう。それを見た教授は、

「それでは、私がやってみましょう」

というのと、鈴鹿美鈴と交代した。

そしてちよつとおどけた仕草で、

「先生どうぞ」

といった感じで、鈴鹿を自分が座っていた椅子に座るよう促した。三人はホイット教授が加わったので緊張したが、すでに同じところを四回弾いているので大丈夫だった。一人で弾き始めるセカンド・バイ

オリンの町田里子の弓はもう震えたりしなかつた。それどころか教授が弾き出すと直ぐに、三人は何か強力な磁石に引き寄せられるようにぐいぐいと音楽の中に引き込まれていき、アツという間とも、永遠に続いていたかのようなともいえる初めて経験する不思議な感覚で八小節間を弾き終えた。聞いていた嘉太郎も美鈴も頬に鳥肌が立っている。教授の演奏は年令のせいもあるのか、ビブラートは粗く、音程

は美鈴の方が完璧と思えた。それにもかかわらずそこには、『これが音楽なのか』と思わせるものがあった。そのことがその場にいる五人にはつきりと感じ取れた。教授は、

「年をとってしまつてミスズのように綺麗に弾けなくなつてしまつたが、どうでしたか」

嘉太郎は、たった八小節の音楽に深く感動してしまつて、直ぐには言葉が出なかつたが、

「本当の音楽がありました」

と片言の英語でやっとの思いでいった。教授は、
「ミスズ、もういちどやってみますか」
と促した。

美鈴は今日の生徒は彼らですからと、嘉太郎に譲った。嘉太郎が席について一同は同じ箇所を弾きはじめた。教授は八小節目に来ても止めなかつたのでそのままチェロがメロディを受け継いだ。十六小節

でチェロのメロディが一段落したところで教授が立ち上がった。

「私の真似では駄目です。真似ではなかつたのかもしれませんが、私には何となくさつき私が弾いたとおりに弾こうと、お二人とも思っているように感じられました。演奏には真の自発性が大切です」

と、嘉太郎と熊本匡に対していった。

嘉太郎は、先ほどホイット教授が弾いてみせたと

きには

「なるほど、そうか」

と思つたのに、いざ自分が弾くと

「それでは駄目だ」

といわれる。何をどうすればよいのかわからなくなつてきた。『真の自発性』などといわれても、この道を究めた大先生を納得させるような自発性など、急にいわれて發揮できるはずが無いではないかと思う。

ホイット教授は、続ける。

「私も長年カルテットをしてきましたが、きつとみなさんも私に負けないくらい長くカルテットをしてきたのではないですか。だから、ご自分の心の中を探してごらんなさい、これほどの素晴らしい曲ですからきつと自分自身の感じ方があるはずですよ。どこかで聞いた素晴らしかった演奏とは違った、あなたがたのベートーヴェンがね」

こういわれたとき嘉太郎には、思い当たるところがあつた。たしかにこの曲の素晴らしさは、わざわざウィーンまで来て先生にみてもらおうと思うほど、嘉太郎だけでなく四人とも強く感じていることは間違いない。感じているというより知っているといつたほうがいいのかもしれない。しかしそれはホイット教授がいうように、『どこかで聞いた素晴らしかつた演奏』として心にあるもので、その心にインプツ

トされた記憶をなぞろうとして演奏しているに過ぎない。はたして自分の歌として演奏しようとしたことがあつただらうか。

この日嘉太郎たちが弾いたのはたったこれだけだった。レッスンは一時間もたたないうちに終わった。そのあとは教授の奥さんの心のこもった手作りのケーキと紅茶が出されて、奥さんを変えて、二時間近

くも話し込んでしまった。その中でも、教授からは興味の尽きない話がふんだんに出てきた。レッスンについてこんな会話も交わされた。

「今日は、サトコとヨシコには何もいいませんでしたがどうでしたか」

と教授は二人に向かつていった。

こんなところにもホイツト教授の優しい人柄が出ている。里子が、

「先生が弾かれたときには、まるで自分でないような感覚で弾いていました」

と顔を高潮させていった。嘉子も

「私も同じだった」

といった。教授は嬉しそうに笑顔で、

「それはありがとう。そういってもらえると本当に嬉しいです」

と行って奥さんの方を見ながらいった。

奥さんはレッスンのときにはこの場にいなかつたので、

「私は、その場に居合わせなかつたのが残念だわね。きつとメロデイの人がいい演奏をすると他の人たちは自然にいい演奏をするものなのね。コンチエルトでも、ソリストが素晴らしい演奏をするとオーケストラも素晴らしい演奏をするし、そうでないときには、同じオーケストラでも詰まらん演奏をしてしま

うものなのね」

といった。

教授の奥さんはかつてフルートのソリストとして活躍した人で、おそらく自分の体験を思い出して話したのだろう。教授が、

「そう、よい演奏は一緒に弾いている者たちに伝染するものなのです。これがアンサンブルの面白さですよ」

というと、奥さんも、

「伝染するのは、味気ない演奏もね」と付け足した。

五人はホイツト教授の家での楽しく充実した時間を終えて、ホテルまでの十五分ほどの道を歩いて帰った。レッスンは明日もう一回ある。

嘉太郎は、この一六小節間に教授がいった言葉を

反芻してみた。最初にやや緊張で硬くなつて弾いた演奏に対しても、より心を込めて弾いたつもりの二回目の演奏に対しても『駄目です・・・心に感じたままにこの美しいメロディが楽器から出ているかということだけを考えて弾きなさい』といわれた。

褒められると思つた美鈴の美しい演奏に対しても『ミスズの心を出してごらんなさい』といわれ、さらに『ヨシタロウもミスズも堅苦しいだけです。音

樂が持っているものだけをあなたの感性で汲み取って、私に届けてください』ともいわれた。

鈴鹿美鈴にくらべて音質もビブラートも粗いと感じられるのに間違いなくみんなの心を深く打った教授の演奏を思い出してみた。そして教授の演奏に感動して、目から鱗が落ちたと思つて弾いた自分の演奏に対しては『真似では駄目です・・・演奏には真の自発性が大切です』といわれた。明日のレッスン

までに何らかの答えを見つけたい。

五人はホテルに帰ると、小さな会議用の部屋を借りて練習を始めた。ここでは鈴鹿美鈴も先生ではなく嘉太郎たちと一緒にあって、ああでもないこうでもないといいい合いながら練習した。だれも音程がどうの、何処何処が合わないなどというものはなく、ただひたすらどのように弾くのか、表現の仕方に心を集中させた。みんなの中には、ついさきほど教授

から受けた新鮮な刺激がまだ残っていたが、自分たちだけの演奏を繰り返すうちに少しずつそれは薄まってしまうのをどうしようもなかった。五人は夕食も忘れて練習したが、誰かがトイレに行つたのをきっかけに、ひどく空腹であることに気付いて練習を打ち切つた。

「とにかく明日は、もうあまり緊張することもないでしょうから、教授の前であの曲を弾ける幸せを思

う存分楽しみましようよ」

という鈴鹿美鈴の言葉で、レッスン第一日を締めくくった。五人は街に出て感じのよさそうなレストラ
ンで食事をした。

レッスンの二日目は午前中である。この日の夕方
嘉太郎たちはウィーン国際空港から帰国の途に着く。
短い滞在だが、これは鈴鹿美鈴のスケジュールも考

慮して決めたことだった。五人は、これといった新たなことが何も出来ていないという、宿題が出来上がっていない子供のような気持ちと、ホイット教授の心に響く言葉の数々を楽しみにする気持ちと半々で教授の家の呼び鈴を鳴らした。

二日目のレッスンでホイット教授は楽章の終わりまで黙って聴いてくれた。そして主要なメロディだけでなく四人が弾くすべての音に表現すべき内容が

詰まっていることを、例をあげながら話してくれた。昨日ホテルでさんざん練習したことについて、成果が見られるというような言葉はもらえなかった。しかし、レッスンのあと、教授から思いがけない提案があった。

「このあたりで一番美味しいランチを食べさせる店を知っているの、今日は私がご馳走しましょう」といって、ずっと傍で聴いていた奥さんに同意を求

めた。

「そうね、あすこね・・・きつと気に入ってもらえるわ」

と奥さんは笑顔で答えた。

七人での楽しく賑やかな昼食となった。教授夫妻はともに八十を越えているのに、よく喋るし、よく食べる。これが元気の源だと嘉太郎は思った。別れ際に教授が、

「日本に帰ったら、上沼正さんによろしく」といった。

上沼正は広島でソロ活動をしているバイオリニストで、五人ともよく知っている人だ。知っているどころか、その演奏は常に心に伝わることで嘉太郎たちの尊敬する演奏家のひとりなのである。近いうちに彼のリサイタルが望巖カルテットハウスで予定されてもいる。

「上沼さんをご存知なのですか」

「彼は、こっちにいるとき私のところで勉強しました。素晴らしい音楽家です」

五人はこんな偶然があるものかと驚いた。と同時に上沼正の、心を打つ演奏の秘密を見つけたような気がした。葉羅嘉太郎は突然の提案をした。

「上沼さんはこんど私のホールでリサイタルをされます。それを聞きにお二人で日本に来ませんか？ご

招待しますよ」

「あなたのホールで？上沼はヨシタロウのホームコンサートに出るのですか？」

これには熊本匡が詳しく説明した。葉羅嘉太郎が私財で望巖カルテットハウスを建てたこと、YBSQがこけら落としをしたこと、それは素晴らしいホールでその後も優れた演奏家が次々と演奏会を行っていることなど。ホイット教授は目を丸くして熊本の

説明を聞いていたが、

「そこで開かれる上沼のコンサートに招待いただけるとは光栄です。しかしいまはもうあまり遠くに旅行することはなくなりました。日本まではとても無理じゃないかと思えます」

と残念だが辞退せざるを得ないといった。そこで

「はい、そうですか。残念です」

といわないところが嘉太郎である。

「八十才を越えたヨーロッパの音楽家が来日するこ
とは珍しくありません。毎年のようにやってくる指
揮者もいるくらいです。ぜひおいでになつてくださ
い。私の家でゆつくり過ごしていただければ、われ
われもこんな嬉しいことはありません」

教授は奥さんとぼそぼそ小声で話していたが、五
月の初旬なら気候は良いし、日程的にも大丈夫だか
ら行つてもいいといった。上沼正の望巖カルテット

ハウスでの演奏会は五月七日、まもなくである。

嘉太郎の一行が帰国して三週間後、五月三日にホイツト教授夫妻が来日して、葉羅の家に滞在した。そして五月七日の上沼正のコンサートを聴いた。ホイツト教授と上沼正が会うのは三十年ぶりということだったが、二人はしばしば会っていたかのように直ぐに打ち解けて積もる話に花が咲いた。教授は、

上沼の演奏は自分が教えていたときよりも遙かに素晴らしくなっていると感心していた。

コンサートの翌日、上沼正が葉羅の家に来てきてホイト教授を囲んで心温まる時間を過ごした。鈴鹿美鈴と嘉太郎のカルテットのメンバーも全員集合である。みな昨夜のコンサートで顔を合わせたばかりだが、ふたたび話の輪が広がり、それは夜遅くまで続いた。その席で嘉太郎たちは歓迎の演奏を

した。ウィーンでレッスンを受けたベートーヴェン
のアダージョである。しかしこのとき教授はただニ
コニコして拍手をしただけで、特に演奏についての
コメントはしなかった。それが何を意味するのか嘉
太郎は気になったが、あえて聞く気にもなれずその
ままであつた。それだけでなく、せつかく上沼正が
素晴らしいホールで素晴らしい演奏をしたばかりな
のに、どうして自分たちの演奏などしてしまつたの

かと後悔さえした。ウィーンでのレッスンのあと帰国してから真剣に練習した跡を聴いてもらいたいという気持ちもあつたが、それでも詰まらんことをしてしまつたと思うのだつた。

とにかくホイツト教授を囲む楽しい日々はあつたという間に過ぎた。教授夫妻は原爆資料館や宮島などを見物してから帰国して行つた。葉羅が招待したいといつたときには体力を心配して躊躇していたが、

夫婦二人元気に広島滞在を楽しんだようだった。

念願のトリオ演奏会

また熱狂の時間が終わって葉羅嘉太郎の日常が戻ってきた。いまの葉羅嘉太郎の日常とは、カルテット

の練習と望巖カルテットハウスの演奏会に関わることである。ホール建設の動機となったのは、出来たホールで毎月のように自分たちの演奏を、満員の聴衆にきかせることであつた。しかし、それはどこかに消えてしまつて、ホールではあいかかわらず頻繁に室内楽のコンサートが行われていた。ここでは一流しか演奏しないということには、必ずしもなつていなかった。使用料が安いこともあつて、アマチュア

やそれに近い演奏家たちもたくさん利用しはじめていた。葉羅はそれでいいと思った。室内楽を愛する人たちが望巖カルテットハウスを大いに楽しんでもらえることは素晴らしいことだと考えた。一時考えかけた、超一流しかこの舞台は受け入れないというようなセクト意識を、葉羅嘉太郎は既に捨てていた。ただ月に一回程度企画する自主公演では、葉羅は山科と相談しながら極上の演奏家たちのコンサート

トを企画した。

葉羅嘉太郎が、いま実現したいと思っ
ているのは上沼正のバイオリン、そし
てすでに一度ピアノ・トリオで望巖
カルテットハウスに登場しているピ
アノの山根倫子、それにチェロの夏
目一水による同じくピアノ・トリオ
の演奏会である。夏目一水は、錚々
たる経歴のチェリストで長く中央で
活躍していたが、

音楽界のさまざまな人間的なしがらみを嫌って、半ば引退するような形で広島に引っ込んでしまつていゝる。そして一年に一回くらい地元でリサイタルを開いてゐる。しかしその深い音楽性とそれを紡ぎ出すまれに見る美しい音色は知る人ぞ知るところで、リサイタルはたいした宣伝もしないのにいつも満員であつた。ところが気さくな上沼と違つて夏目は孤高の仙人のような性格で、なかなか近付きがたいとこ

ろがある。常に聴く人を感動させる演奏をするため、彼のコンサートを希望するむきは多く、話を持ちかけられることも少くないが、ほとんど受諾しないのである。そのうち演奏を依頼する者もめつたになくなって、いまでは、自分が開く一年に一回のコンサートが、唯一の夏目のチェロを聴く機会となつていたのである。

葉羅は、上沼と夏目の音楽の傾向はどちらにも激し

さとか、力強さといった要素よりも、どちらかという
うと温かく聴く者の心に訴えかけるといふ点を重視
した演奏で、二人の音楽には共通点があると考えて
おり、この二人に葉羅が当代世界屈指の室内楽ピア
ニストの一人と考えている山根倫子の組み合わせを
何とか実現させたいと思つているのである。

はじめ葉羅と山科は、フランスを活動の拠点にし
ている山根倫子とのスケジュール調整が難しいと思

っていたが、それよりもむしろ上沼と夏目の共演を実現させる方がずっと難しいことを思い知るようになる。山根は毎年地元岡山に戻って活動する期間があり、その時期を選べば彼女との日程調整はそれほど困難でないことがわかった。

夏目一水は、上沼正の音楽性の高さを評価していたが、要請があればどんなところにも気さくに出かけていき、ときにはアマチュアと一緒に室内楽を楽

しんだりする上沼の演奏家としての姿勢をあまり快く思っていないなかつた。一方上沼正は、自分よりも若い夏目のことを

「夏目先生」

と呼んでいて、そのことからわかるように、音楽家として敬意を払っているのだが、そのような呼び方の裏には夏目の人柄に対する近寄り難いという見方が隠されているのであつた。二人は、同じ地方都

市に活動の本拠を置きながら顔を会わせることはなかつた。だからといってお互いに反目するような出来事があつたというわけでもない。

葉羅嘉太郎と山科武彦が上沼、山根との共演を要請しに夏目一水を訪ねたとき、夏目はその人たちとだつたらぜひブラームスのトリオがやってみたいなどといかにも要請を受け入れるかのような話し方をしたにもかかわらず、結局は丁重に辞退されてしま

った。特に日程が合わないということでもなさそうだった。上沼と山根は夏目一水との共演を、

「先方さえよければ」

と受け入れる意思を示していたので、その実現の成否は夏目の意向にかかっている。

葉羅と山科が、上沼と山根が希望している候補曲をもつて再び夏目を訪れたのは、最初の訪問から五日後のことであつた。同じ用件にもかかわらず、夏

目がアポイントを断らなかつたことに、葉羅たちはこの話は脈があると感じた。彼らが夏目に示した候補曲はブラームスの第一番、ドボルザークの《ドゥムキー》といふとともにメロデイの魅力に満ちたポピュラーなピアノ・トリオに加えて必ずしもポピュラーとはいえないが、やはり美しさでは前二者に劣らないショーンソンのピアノ・トリオであつた。最後の曲はフランスを本拠にしている山根の強い希望であ

ることを葉羅たちはいい添えた。

前回ブラームスが入れたいなどと話した夏目だが、ショーソンの名を聞いて表情を輝かせた。実はショーソンのピアノ・トリオは夏目が若いときからほれ込んでいた曲だったのだ。それを山根倫子が希望しているというのにも強い反応を示した。夏目は山根の演奏をフランスの著名なバイオリニストと共演したコンサートで聴いたことがあつたのだ。そのとき、

日本人にあのような素晴らしい室内楽ピアノリストがいることを知って驚いたと葉羅たちに話したのだった。そのフランスのバイオリニストは夏目が聴いたときだけでなく何度か来日して、そのたびに山根と共演しているし、その組み合わせでCDも何枚か出している。夏目の話しでは、まるでバイオリンは上沼でなくてそのフランス人ならいいとでもいいいたそうに聞こえるのだった。しかし、すでに了承してい

る上沼をはずすなどということは出来る相談ではない。そもそも葉羅は地元の二人の真に優れた音楽家を結び付けたくてこの企画を思いついたのだ。上沼と夏目が共演しなければ意味がなくなる。

夏目は前回よりは前向きと思える姿勢を示したが、「しばらく考えさせて欲しい」

として、この日も返事を保留した。葉羅は、どうして夏目がそこまで上沼との共演に踏み切れずにいる

のか理解に苦しんだ。葉羅は、夏目の中に上沼に歩み寄る勇気がないだけのような気がするのだった。

二回目の訪問からさらに三日経ったとき、葉羅は夏目からの電話を受けた。葉羅は、ついに夏目が結論を出したと思った。了解の返事ならもちろん問題ないが、ここで拒否されたら、それは最終決定とせざるを得ないとも思った。その場合は上沼と山根のデュエットで行くことにしよう、とそこまでを取り

次がれた受話器を取るまでの十数秒の間に考えた。

夏目の電話は、葉羅が想像したどちらでもなかつた。夏目は、望巖カルテットハウスが近い時期に空いているときがあつたら、一度練習に使わせてほしいというものであつた。そういつて自分が都合のよい日を何時いつと並べた。もちろんそれを断る理由もないので、直ぐに話はついた。二日後の午後というのが夏目の望巖カルテットハウスでの練習日と決

まった。

葉羅は、夏目が出演の条件としてホールが自分の基準に合うものかどうか試すつもりかと思った。確かに彼がこのホールに演奏者としてはもちろんだが、聴衆としても姿を見せたことはないように思う。やたらに気難しく考える人だと葉羅は思ったが、また別の考え方もしてみた。夏目は中央でそれなりの評価を得て活躍していたのに、突然のように地元を引

つ込んでしまった。中央での音楽界の人付き合いに嫌気が差したかららしいと噂されている。そのような性格の芸術家は、特に音楽家とか絵描きによくあるのだが、自分の殻が異常に固いのである。

葉羅は一か八かの手に出た。夏目がホールで練習する日に上沼正にも来てもらって、強引に会わせてしまおうというのである。わだかまりがあるためにお互い惹かれあっているのに歩み寄ろうとしない若

い男女をはめるときに使う手である。若い男女ならともかく、ともに一家を成した一流演奏家にそのよ
うな手を使って大丈夫かと、山科も心配したが、葉
羅には自信があつた。

葉羅は上沼に、こんどのコンサートのことで折り
入って相談したいことがあるから会いたいといつて
電話した。そして、

「もしよかったら、楽器をお持ちいになつてホール

で練習なさったらいかがですか」と水を向けた。

先日行われた上沼正のリサイタルのあと、ウィーンから招待したホイット教授をまじえて歓談したとき、上沼が、

「こんなホールで練習できたら、どんなにか気持ちがいいだろう」

といっていたのを、葉羅は覚えていたのだ。

しかも夏目が練習に来る日に、上沼には表向きの予定がなにもないことを、葉羅は上沼のブログで確かめておいたのである。上沼は、午後夏目が練習に来るといふ日の午前中にホールにやって来た。もちろん、午後夏目が来ることは上沼には伏せてある。上沼にはトリオへの出演の件は、夏目は考慮中だとだけ伝えてあった。

上沼は誰もいないホールで、心行くまで音を楽し

みながら練習した。上沼には午後ホールの予定が入っているが、それは練習利用だから、午後の予約時間の直前まで大丈夫といつてある。十三時十分前にホールにやって来た夏目は、出迎えた葉羅に案内されて、いきなりホールの客席入り口から中に入った。その瞬間、この世のものとも思えない美しい音色と、突然の訪問者にもストレートに語りかけてくるようなバイオリンの響きが夏目の心を捉えた。人が入っ

てきたので上沼は演奏を中断して、

「あつ、時間ですね」

とあわてて傍の椅子の上においてあつた青いケースに楽器をしまい始めた。客席の一番後ろの暗いところから入ってきたのが誰なのか、上沼にはわからなかつたようだが、二人がどんどん舞台に歩み寄つたので、それが葉羅と夏目であることを直ぐに認めたと。葉羅は、

「ええ、次の方がお見えになったのですみません。

そろそろ・・・」

とわざと改まったいい方をした。上沼はそれには答えず夏目に向かって、

「夏目先生、お久しぶりです」
と挨拶した。

「お久しぶり」

というからにはいつか顔を合わせたことはあるのだ

ろうが、おそろくこの十年くらいは会ったことはないのではないかと、葉羅は思った。

「先生」

といわれて、夏目も、

「上沼先生、こちらこそ。この度はトリオでございませう。さしていただくということ、よろしくお願いいたします」

といった。

何ということだ。あれだけ渋るような態度だった夏目一水が、上沼の顔を見た瞬間に、すでに共演が決まっているかのような挨拶である。上沼の顔を見て、もう後に引けないことを悟ったのか、それともいましがたほんの数秒間だったが耳にした上沼の音楽に触れたためなのか、とにかく懸案は一瞬にして解決してしまった。葉羅の作戦がもののみごとに功を奏したのである。

そして二人はプログラムについても、ブラームス
はいいとして、せつかく山根さんがピアノを弾いて
くれるのだったら《ドウムキー》よりもシューベル
トのほうがよいのではないかとか、シューベルトと
ブラームスの両方は重過ぎないかなどと、ずっと親
しくしている音楽家同士のように話すのだった。と
にかく山根倫子との共演が楽しみだということとで二
人の意見は一致して、あとはミュージック・プロデ

ユースに任せようといつて夏目は練習のために舞台上がった。上沼は葉羅と客席の後ろの方に並んで立って舞台の方を見ている。それを見た夏目が、

「そこでお聴きになるのですか」と聞いた。

「いや、ちよつとだけホールの響きを聞いてみたくて。すみません直ぐ退散しますから。チューニングの音だけでも聞かせてください」

と上沼がいった。

夏目は

「はい、はい」

と行って楽器を取り出し、弓に松脂をつけ上沼がケースを置いていた椅子に座って、弾こうとした。そのとき夏目は舞台の床にチェロのエンドピンの穴がほとんどないのを見て、楽譜の入った鞆からエンドピンたてを出して自分の前におき、チューニングを

始めた。この動作を見た葉羅は、そのことだけで夏目が人柄の点でもうまくやっついていけることを直感した。夏目は響きを確かめるように丁寧にチューニングをしていたがやがて、バッハの無伴奏チェロ組曲第六番のプレリユードを弾き始めた。速く細かい動きが、残響豊かなホールでどのように響くかは、演奏者の気にするところなのである。一区切りのところで夏目は演奏を止めた。そして上沼たちに向かつ

て、

「どんな感じですか。弾いているととても気持ちがいいのですが、響きすぎということはないですか」ときいた。

「非常に良く響いていますが、音の輪郭ははっきりしています」と上沼が大きな声でいった。

夏目は

「ありがとうございます」

といつて、こんどは《アヴェ・マリア》を弾き始めた。いつ始まったかわからないように静かに弾き始められた音が、ピアノシモにもかかわらずホールの隅々まで届いていく、長い音は微かに膨らみながらやがて動き始める。その音楽は葉羅と上沼の心を満たしていく。しかし、二人は足音を忍ばせて、気付かれないようにホールを後にした。ホールを出る

と、

「今日はありがとうございます。ホール使用料はお幾らお払いすればいいのですかと上沼。」

「とんでもない、今日はこちらがお呼びたてしたのですからご心配なく」

「それではちよつと・・・」

「いやいや、本当に大丈夫ですから」

押し問答のあと上沼が、

「折り入ってお話というのは何でしょうか。ところで、夏目先生はトリオのコンサートお受けになったのですね」

と聞いた。

「実は夏目さんが承諾のご返事を先延ばしにされていたので、そのことで万一都合がつかないというようないことがあつたらどうしようかと思ひましてね。」

そうなった場合のことをご相談させていただけようと思ひましてね。でもさつきお二人が顔を合わせられた瞬間に、夏目さんの返事が出てきてしまいました。きつと上沼さんの音楽を数秒間聴いただけで決断されたのでしよう。ありがとうございました」

「そういうことでしたか。実は私は昔から夏目さんとは一度トリオがしてみたいと考えていました。が、なにしろご存知のように気難しいところがおりと

聞いていましたので、こちらからはいい出しにくくてね。それが葉羅さんのおかげで実現して本当に嬉しいですよ。おまけに山根さんのピアノという飛び切りの共演者までついてですから何と感謝したらいいかわかりません。ギヤラなどいらないう思いです。こちらから演奏費を出したいくらいです。先日のホイット教授のことといい、とにかく葉羅さんには足を向けて寝られないですよ」

上沼正は大変な喜びようで帰つていった。葉羅は、上沼がどんなに感謝しても、それらのことはいずれも室内楽にのめり込んでいる自分がやりたいと思うことをやっているだけで、別に上沼を喜ばせようとしていない。だが、自分が理想と思うような演奏会を実現させることは、そこに参集する演奏家をも幸せにすることがあることを知ったのである。元はといえば、自分たちのカルテットの場を夢

見て作った望巖カルテットハウスだったが、それを遥かに越えた別の夢が次々と実現するのであった。

葉羅嘉太郎の迷い

それにしても葉羅嘉太郎たちのカルテットはどう

なるのだらう。葉羅たちは、ホールができたときの披露の会で一度弾いただけで、そのあとの練習はこれまでどおり葉羅の自宅で、そして発表会は地元の公民館で行った。葉羅嘉太郎の中で自分たちが室内楽を演奏して楽しむことと、望巖カルテットハウスに一流の演奏家を呼んで室内楽コンサートを開くこととはまったく違うものであることがはつきりしてきていた。後者には、自分が聴きたいと思うコンサ

ートを実現させる面白さがあり、それを聴きに来る多くの室内楽ファンとともに一流の音楽を楽しむことが出来る。

自分たちが演奏して楽しむ室内楽には、そのような社会的意味はない。他人が聞けば一流演奏家の演奏とはまったく似て非なるものとしかいかいえないお粗末な演奏である。しかし弾いている本人たちにとつては一流の演奏を聴くのと比べても決して小さいと

はいえない音楽の喜びがあり、満足もある。そのためには多くの努力も必要だが、どんなに努力しても決して一流の演奏家のような一流の演奏になることはない。一流どころか、音楽学校の生徒たちによる演奏にも及ばないといっても間違いでない。にもかかわらず、大きな達成感は得られる。葉羅たちのカルテットは、いまも月に一回くらいのパースで練習を続けている。

このところ、その葉羅たちのカルテットの練習には何となく冷めた雰囲気の流れている。みんなでウイーンまで出かけていったホイット教授のレッスンは、葉羅たちの意欲に火をつける役目を果たしたが、それは一時的なものにしかなくなっていない。自分たちの演奏と、望巖カルテットハウスにやってきては素晴らしい演奏を展開していく一流の演奏家の演奏とのあまりの違いを見せ付けられたためだろうか。し

かし、それは何も望巖カルテットハウス以前から彼らはずっと知っていたことだ。メンバーが年を取って疲れてきたのか。それとも葉羅たちのカルテットのやりかたに何か問題が潜んでいるのか。

葉羅は、カルテットの中に何となく蔓延してしまっているマンネリ感を打ち破るために、望巖カルテットハウスで練習をする決心をした。ここの舞台には一流しか上がらないというこだわりはすでに捨て

ている。コンサートのない日には公民館の部屋を借りる程度の使用料で練習利用も受け付けることにした。またアマチュアの発表会にも開放したのである。入場料を取らない演奏会には特別の使用料制度も採用した。

あるアマチュアのカルテットが望巖カルテットハウスに来て練習をしたことがある。そのとき葉羅はしばらくそれを聴いていたが、彼らはアマチュアと

しても特に上手いとは思えなかつたが、不思議なことにプロの演奏を聴いたとき以上に、葉羅は自分の演奏意欲が掻き立てられたのである。さらに、いつも真に優れた本物の音楽を聴きたいと思つてゐる葉羅であるが、彼らの発表会を聴いてみたいという興味も湧いてきた。

ちよつと周りを見回せば、世の中にはこのようなことは日常的に行われている。プロ野球が華麗なプ

レーで毎晩のように万余の観客を集めている。それはテレビでも見ることが出来る。その頻度ときたら音楽会とは比較にならない。だが、それで草野球が衰退したという話は聞いたことがない。ゴルフ然り、テニス然りである。体育館に行けば卓球やバドミントンやバレーボールで広いアリーナはいつも混みあっている。平日の午前中には女性や定年後と思われる男性が盛んに汗を流している。見るからに下手く

そもいれば、その中ではとても上手く見えるものもいる。共通しているのはみんな楽しそうにやっっていることだ。

スポーツだけではない、将棋や碁も然りである。真剣な顔をして将棋盤に向かっている素人棋士たちは、自分たちが上手いか下手かなどと考えたりしていない。ただ目の前の戦局に集中するだけである。戦い終わっても、自分たちの指し方が名人たちより

も下手であることを悩んだりしないだろう。そもそも昔からへぼ将棋とかざる碁という言葉が、愛情を持ってこれらのアマチュアたちを見ているではないか。

どうも音楽の場合上手か下手かにこだわりすぎるような気がしてならない。かといって、下手に弾くより上手にできた方が明らかに面白い。ホイット教授のレッスンを目を開かされたように思った、『自分

たちが感じたままに表現する』ためには技術が必要である。しかし、大学で初めて楽器を買ってオーケストラのサークルに入り、勉強や仕事の傍ら、人によつては休日にしか楽器のケースを開けないというもの、少しばかり練習してみたところで、三歳とか四歳から始めて、血のにじむような練習を続け、多くのライバルたちに打ち勝つて一流になつた専門家と同じように弾けるはずがないではないか。そん

な簡単な理屈が納得できないで悩んだりしているのが、真面目なアマチュア音楽家なのである。いや、その簡単な理屈は百も承知しているのだが、心の底ではいつもなんとかして彼らのように弾きたいと思つていたのである。しかもある程度近づくことができるとさえ思っているのである。

その思いが現実にはありえない単なる願望であることを認めたらならないところが、草野球の連中と少

し違ふところである。心をこめて弾いたつもりの演奏をホイツト教授に

「違ふ」

といわれてしまうことからわかるのは、草野球で自分が打った打球が、たとえ外野まで飛んでも、プロ野球で弾丸ライナーがレフトスタンドの中断に吸い込まれる打球とまったく違ふことを自覚できない草野球選手は一人もいない。もしかしたら、アマチュ

アで上手くなりたいたいがんばっている音楽家たちには、葉羅嘉太郎自身その中に含まれると思うのだが、彼らには草野球選手の場合ほどプロと自分たちとの違いが自覚できていないのかも知れない。

葉羅は考え続けるのだった。自分たちがそこで演奏するためには望巖カルテットハウスを作るまでの猛進振りはどこに行つたのだらうか。

ヨーロッパ室内楽聴き歩きの旅へ

嘉太郎は、気分転換のために嘉子と二人で一週間のヨーロッパ旅行をすることにした。オーストリア、ドイツ、フランス、イギリスで室内楽コンサートを聴くのが目的である。イギリスはもちろんロンドンのヴィグモアホールである。葉羅夫妻は七日間のヨーロッパ滞在中に五つの室内楽コンサートを聴いた。

ヴィグモアホールではたまたまヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団の公演に行き当たった。彼らの望巖カルテットハウスでの二度目のコンサートが一年後に迫っていることもあり、葉羅夫妻とYBSQのメンバーは楽屋でおよそ一年ぶりに顔をあわせた。そのとき葉羅はYBSQから、こんど広島に行ったときはバルトークを中心にしたプログラムでもいいかと訊かれた。葉羅が、

「何なら、二日連続でバルトークの六曲の弦楽四重奏曲全曲演奏にしたらどうですか」

と勧めると、彼らは、それは面白い案なので考えて見るといった。

嘉太郎と嘉子はこの旅行で、弦楽四重奏の演奏会を四つとピアノ・トリオの演奏会をひとつ聴いた。いずれも感銘を受ける素晴らしい演奏会だったが、連日名演奏が続くので、その前の演奏会で何を聴い

たかさえ思い出せない状態であつた。結局この旅行で印象に残つたのは、YBSQと楽屋で話したことくらいであつた。それと初めて見るヴィグモアホールにも強い印象を受けた。室内楽好きにとつてはあまりにも高名なホールだが、実際に見た感じは思つたよりずっと質素なものであつた。しかしそこには百年の歴史が感じられた。そのヴィグモアホールでYBSQが何を弾いたのかさはつきり思い出せな

い。名演奏に飽食状態となっていたのである。

旅行から帰った葉羅たちは、世界的な演奏家たちの名演奏に毎日のように浸っていても、所詮他人が音楽しているのを傍観するに過ぎない。聴いている瞬間は演奏の素晴らしさに感激するが、自分自身は何一つ創造に関わっていない。そう思った葉羅は、やはり自分でも演奏すべきだと思ふのだつた。

葉羅は次のカルテットの練習で、みなに問題を投げかけてみた。

「わしらが演奏することに意味があるんだらうか」
唐突な葉羅の問いかけに三人は戸惑ったが、最近考
え込んでいて練習にもいまいち熱が入っていない嘉
太郎の様子を見ている嘉子には、何となくわかるよ
うな気がした。

「お父さんは考えすぎじゃないの。こうして合奏で

きるのが楽しいんだから、それでいいじゃないの」

「でも嘉子さん、私もそれ、考えたことがあります。

世の中コンサートでもレコードでも、幾らでも素晴らしい演奏が聴けるのに、何故苦労して下手な演奏を続けるんだらうってね。特に発表会については疑問に思うことがありますね」

「私はあまり深く考えないたちだから、こうして元気にしている仲間と集まって、いつもの練習が楽し

ければそれ以上何が必要なのって感じね。嘉太郎さんが、『一流のホールを作って、そこで一流の演奏会をするんだ』っておっしゃったときは、子供みたいな夢をおっしゃっていると思いましたわ。でもおかげですごい人たちの演奏会が身近に聴けてありがたいし、こんなところで練習できるなんて素晴らしいけど、私は葉羅さんのお宅での練習も、公民館での発表会も充分に楽しいと思うわ」

普段あまり自分の意見をいわない町田里子だが、
そういつてみんなを見回した。熊本匡が自分の意見
の続きを喋りだした。

「われわれがやっていることは草野球みたいなもん
だからね。草野球やってるおっさんたちが東京ド
ム借りて、大観衆を集めて試合したなんて聞いたこ
とないものね。やっぱりおっさんたちには川原の空
地が似合うんだよ」

こういつたあと、熊本は何だか葉羅を批判したように取られそうだと思つて、いいたした。

「このカルテットハウスが悪いつていつてるんじゃないよ。私は、さつき最初に嘉太郎さんがいいだしたように、我々が演奏会をする意味を考えてみたいといつてるんだ」

草野球という言葉聞いたとき、常日頃からアマチュアの演奏は草野球といつてゐる嘉太郎は嬉しく

思ったが、町田も熊本もカルテットハウスなど別に
なくともよかったといっているようで、少し面白く
なかった。金持ちの道楽に過ぎないといわれている
ような気がしたのである。嘉太郎が少し自嘲気味な
表情を浮かべていい出した。

「たしかにあのころわしは、毎日朝から晩まで練習
して、一週間に一回は演奏会をしたらどんなに楽し
いかと思ったよ。聴きに来る人にとつても、毎週弦

楽四重奏の名曲が次々と聴けるのだから悪くはない。しかも良いホールで無料でね。でも幾ら練習しても毎週一晩分のプログラムなんか準備できるわけないよね。だいたい何か月練習しても仕上がりの程度なんて知れてるんだからね」

「だから、こうやって練習して、練習そのものを楽しむのは問題ないんだよ。ただそれを他人に聴かせようとするところが問題じゃないのかね」

熊本匡が口を挟んだ。

「結局嘉太郎さんと匡さんはなにがいろいろいいたいわけ？」

今日は町田里子がよく発言する。

「だから発表会をしないことにしたらどうかね。そうしたら『とてもまとめられない』などという理由でベートーヴェンの後期を避けて通る必要はないし、ドビュッシーだろうがバルトークだろうがやってみ

たいものはどんどん出来るじゃないですか」

「でも、ぜんぜん発表会なしというのもね・・・」
嘉子がいった。

「そういうけど、それはこちら側の思いで、私たちの演奏を本当に聴きたいという人がいるとは思えないけどね」

「そうかなあ、YBSQはやったし、こんど上沼先生たちのトリオもあるけど、そんな名演奏家なんて

めつたに聴けないんだから、もつと気軽に聴けるんだつたら、私たちの演奏だつてそれなりの楽しさはあるんじゃないの。やたらに謙遜しすぎるのもどうかと思うけど」

こういつたのは嘉子だ。

「そうよね、無理やり弟子にキップを売りつけるわけでもないんだから、気が向いた人がふらつと聴きに来たとしても、聴いてもらふことをそんなに遠慮

しなくてもいいと思うけど」

と里子が嘉子に同調した。

「そうだね。でもホイツト教授がいいアドバイスを
いってくれたけど、実際にはそう上手くは行かない
からね」

と嘉太郎が目の前にある楽譜を見ながらため息混じりにいった。

「表現するには技術が要るからね。感じたことを素

直に出せばいいというのは技術のある人にいうことだよね。ホイットさんのレッスンでいえば、それが多少でも出来そうなのは美鈴さんくらいなものだよ
ね」

といたたのは熊本匡だった。

「でも、あの七番のアダージョのメロディだったら、我々でもある程度出来るんじゃないかな」
と嘉太郎。低きに流れるような同調意見が出ると反

論してみたくなるものだ。

「でも、レコードの演奏なんかとよく比べてみると、音程が微妙にずれたり、レガートにすべきところが上手くいっていなかっただけで、やっぱり『出来る』とはいえないかもしれないよ」

「そりや程度の差はあるだろうけど。そんなこといっただら下手は演奏するなということ？」

熊本匡と葉羅嘉太郎のいい合いの様相になってきた。

「何も考えずに、ただ少しでも上手く演奏しようと思つてやつていたときは楽しかったけど、そんなことごちやごちやいいでしたら、何だか練習が楽しく出来なくなつちやうみたいね」

嘉子が不満そうな顔でいうと里子も、

「まあ、いいじゃないですか。お茶でも飲んでから私たちの音を出しましょうよ」

「とにかく発表会をして人に聴かせるのはやめにし

ましようか」

葉羅嘉太郎はまだ議論をやめようとしなない。

「何もいま結論を出さなくてもいいのじゃない」

嘉子が、くどいというように嘉太郎にいった。

「まあ、今日は少し練習をして、また時間を置いて話しましようか」

熊本が議論に終止符を打つようにいったので、ようやく嘉太郎も黙った。

その日の練習は、あまり気乗りしない雰囲気のまま、それから一時間ほどで終わった。

望巖カルテットハウスではいろいろなコンサートが続いていたが、嘉太郎は上沼、夏目、山根のトリオを聴いた以外は、ホールに足を運ぶこともなく、楽器を開かない日も多くなった。これを心配した嘉子は、嘉太郎を気分転換のための旅行に誘った。二

人は三泊かけて信州の黄葉を見る旅に出かけた。好天に恵まれたドライブだったが、嘉太郎は長い運転の疲れが残っただけのようないきがした。嘉太郎の気分転換には効果がなかったようで、帰ってきてからも嘉太郎の生活は変らなかつた。

唯ひとつだけ嘉太郎の胸にぼんやりしたアイデアの芽が浮かんだり消えたりしていた。それは、自分

たちがプロの演奏家の真似のようなことをしようとするのではなく、いまの自分たちのような演奏でも必要としてくれる人たちもいるのではないかという考えであつた。専門教育を受けていないとはいつても、若いときから長年楽器を楽しんできたのだから、それなりの技術の蓄積もゼロではない。たくさんのよい演奏を聴いて感性も蓄えてきた。しかし、誰が必要としてくれるのかはわからない。幼稚園や小学

校の子供たちか、老人施設の老人たちか、コンサートに行きたくても出かけられない病院の入院患者か、それともあらたまつたコンサートに出かけるほどの熱心な音楽好きではないが、すぐ近所で無料のコンサートがあれば聴いてもいいという人たちか。嘉太郎はぼんやりと縁側のロッキングチェアに揺られながら考えた。

アマチュアの室内楽フェスティバル

嘉太郎たちと同じようにアマチュアで室内楽を楽しんでいる同好の志は、他のアマチュア楽団の演奏には興味があるものだ。ただその興味は、自分たちの方が上手いということを確認するための興味であることが多い。逆に他の団体の演奏が自分たちより上手いと思う場合は、前向きに受け止める人たちに

とってはひとつの目標になる。それは世界の名演奏家の演奏を聴いた場合よりも、手が届きそうな目標として意味がある。前向きに受け取らない人たちにとってには、妬みの気持ちが生まれたり、欠点探しをする対象になったりもする。もちろん純粹に同好の志と交流できることを喜びとする人たちもたくさんいるだろう。いずれにしても集まった同好の志たちはお互いの演奏を、少なくとも老人ホームや病院に

おしかけて演奏する場合よりは、童謡や演歌でなく本格的な弦楽四重奏曲であつても、強い関心を持つて聴くことは間違いない。

とにかくアマチュアの室内楽フェスティバルのよ
うな催しは行われていて、そのうちの幾つかは有名
である。ここまで考えた嘉太郎は、ミュージック・
プロデュースの山科を自宅に呼んだ。

山科はその日の午後には、いつもの助手吉川末子

と現れた。葉羅の話は、望巖カルテットハウスを使つて、アマチュアの室内楽フェスティバルを開きたいというものだった。それも他でやっているものとは一味違ふ形にしたいというのだった。山科は、国内で行われているその種の行事について調べるように吉川に命じた。

吉川が、調査した資料を持って一人で葉羅を訪れたのは三日後だった。吉川はほとんどいつも山科の

助手として一緒だったので、彼女が発言することは補助的なことを聞かれた場合くらいであった。吉川自身が責任を持って葉羅と向き合うのは初めてであった。葉羅は、吉川の報告を聞きながら、彼女が想像以上にしつかりした人物であることを発見した。

吉川は、国内のそういった行事は、たいてい「アマチュア室内楽フェスティバル」といった風な名称で行われていて、一定の室内楽の定義を定めて参加

団体を募り、書類審査やテープ審査で出演団体数を決めていた。また優劣を競い合うようなコンクール的なものもあるようだった。吉川の調査によると、海外にもそのような行事はあって、むしろ日本よりも盛んであるという印象を持ったという。

葉羅は、吉川の報告を聞いて、すでに行われていたようなものをここでやっても面白くない。他に無い形でしかも参加意欲が湧くような魅力があつて、

それを聴く人たちにとつても面白いというようなものを作りたいたいという考えを吉川に話した。

茶を運んできてしばらく話を聞いていた嘉子は、また嘉太郎の大風呂敷が始まったと思つたが、沈滞した気分のまま家の中でぶらぶらされるよりずっといいと思つた。ただミニスカートから大きく膝を出して嘉太郎と向き合っている美しい吉川末子と、楽しそうに話していることには微かな嫉妬を感じるの

だった。そんなことにはお構いなく嘉太郎は自分の考えを話し続けた。吉川は葉羅の話を忙しそうにメモした。

「分野は、カルテットハウスです。のだから弦楽四重奏だけにしよう。応募数にもよるが、出演団体としては八団体くらいかな。いや、審査などせずに無制限でも構わない。交通費と宿泊費はすべての出演団体に補助しよう。YBSQクラスのカルテットを

特別ゲストとして呼んで、彼らに出演団体の演奏についてコメントをしてもらい、最後に彼らにも一曲演奏してもらおう。そうだ、コメントは出演者たちの良い点を必ず見つけてもらおうことにしよう。おそろく欠点や、より良い演奏にするためのアドバイスはどの団体に対しても無数にあるだろう。だからそういったアドバイスよりもむしろ、どんな小さなことでも何か長所を見つけてコメントしてもらおう」

葉羅のイメージは膨らみ始めた。また、彼の大判振る舞いも例の通りである。

「それは一回限りの行事のおつもりですか」と吉川が聞いた。

葉羅はしばらく考えていたが、

「まず一回目をやってから考えよう。そうだ、弦楽四重奏分野だけでなくピアノ三重奏の分野もあつた方がいい。せつかくのファツイオリを使わない手は

ないからね」

そして、募集方法、宿泊施設、リハーサルの方法、宣伝方法などを山科と相談するようについて吉川を帰した。

吉川末子が、葉羅のアイデアを持ち帰り山科などと社内でも検討した結果を持って再び葉羅を訪ねたのは一週間後だった。こんども吉川一人だった。どう

やら山科は今度の案件は吉川に担当させるつもりのようにだ。吉川の報告内容は次のようなものだった。

開催は、募集期間や応募者の準備期間も考慮しておよそ一年後。募集するのは、とりあえず第一回目としては弦楽四重奏分野のみとする。選考は簡単な書類選考だけで、まだ名の知られたフェスティバルではないので、原則として応募団体はすべて出演できることとする。演奏結果に序列をつけることはし

ない。宿泊は合宿形式で出演団体同士の交流もできるようにする。参加費は一団体につき一万円。また交通費は中国地方以外からの参加者には距離に応じた補助をする。演奏の持ち時間は一団体三十分以内として、一日に十四、五団体の演奏を行う。応募数が多いときは二日間の開催も考える。募集はインターネットと音楽雑誌二誌への広告掲載とする。またゲストのカルテットとして、一年後のその時期にY

BSQの来日は無いが、アメリカとチェコの有名なカルテットの来日が予定されているので、日程調整は必要だが出演してもらおう可能性はあるとのことだった。

葉羅は、ピアノ三重奏部門を取り上げなかった点については、応募状況がまったくわからないことか
らやむをえないと思った。葉羅は、締めくくりはもちろんゲストカルテットの演奏だが、オープニング

は自分たちのカルテットにしたいと、密かに考え始めていた。しかしそのことは吉川にまだいわなかつた。

日程は翌年の九月の土日を含む三連休に決めて、早速望巖カルテットハウスのホームページと音楽雑誌に募集広告を出した。ゲストカルテットの確定はこの時点では難しく、募集広告には世界的な弦楽四

重奏団の特別演奏と、彼らに全出演団体へのコメントをしてもらうという文言を入れた。

広告を出した雑誌の発売日と思われる当日、出来れば参加したいので詳しい内容が知りたいという電話での問合せが吉川宛にあつた。吉川は早速募集要項を送り、インターネットでの申し込みも出来る旨を伝えた。岡山ของกลุ่มであつた。しかし、それつきり一か月の間何の反応も無かつた。葉羅は、そ

の岡山のグループと自分たちとゲストカルテットの三団体のジョイントコンサートでもするかと、冗談をいうのだった。

しかし、冗談をいつている場合ではない。吉川は葉羅の了承を得て、音楽雑誌の次号にも同じ募集広告を出した。この広告で地元広島から一件、東京から二件の応募があり、三度目の広告掲載で、インターネット応募もあわせて合計九団体となった。広告

に示した締切日となつたので自分たちを含めて十団体の参加を決定して、具体的な運営内容とゲストカルテットの確定とに取り掛かった。

参加が十団体だったのでリハーサルに一日、本番に一日の二日の日程として、ゲストカルテットの交渉に当たった。それにはアメリカから来日する予定のエムニア・カルテットが出演可能となつた。演奏してもらうのは一曲だけだが、参加団体の演奏中ず

つと拘束されるということ、それなりのギャラを要求されたが、企画そのものには

「大変楽しみな催しだ」
とのコメントが届いた。

参加十団体の演奏曲目がそれぞれ違っていけばいいかと葉羅も、吉川も思っていたが、申し込み用紙に書かれた出し物は、ハイドンの《ひばり》が二団

体、ベートーヴェンの第四番がなんと四団体と重複している。募集要項に第二、あるいは第三希望まで書いてもらうことにしなかったのは失敗だった。忘れていたわけではなく、アマチュアは自分たちがもつとも得意とする曲を演奏するのが一番だという考えが優先された結果だった。このまま希望通りにするか、変更可能なグループには他の曲を考えてもらうか迷うところであつた。

コンクールなどでは、課題曲が複数ある場合、全員が同じ曲を選んだとしても変更させることはしない。しかし、今度の場合コンクールではない。一般の客も聞くことになる。変更の可能性を一応聞くだけは聞いてみようということになって、吉川が重複している六団体に問い合わせたところ、ベートーヴェンの第四番を希望していた四団体のうち二団体が変更しても構わないといってきた。ひとつのチーム

は何処も希望していない曲に変更することになったが、もうひとつは変えるとしたら《ひばり》だという。《ひばり》が三団体になるのも、ベートーヴェンの第四番が三団体になるのも同じことなので、そのグループは変更無しということにしてもらった。その結果は、講評をしてもらうエムニア・カルテット側にも知らせた。それからしばらくして、エムニア・カルテットから当日はベートーヴェンの第四番を演

奏したいといってきた。これはもしかしたら参加者の三団体が同じ曲を弾くことを知って、あえて選んだ曲目だろうと思われた。彼らのベートーヴェンの第四番は、アマチュアが弾く同じ曲とは似て非なるものだろうから、それはそれで面白いし、この曲を弾く団体にとっては非常に興味のあることに違いない。

その結果ハイドンの《ひばり》が二団体、ベート

ーヴエンの第四番が三団体であとは、ハイドンの《皇帝》、ベートーヴェンの《ラズモフスキー第一番》、ドボルザークの《アメリカ》、モーツァルトの《狩》となつた。そしてゲストのエムニア・カルテットがベートーヴェンの第四番である。それぞれの団体のレベルはわからないが、曲目から推測すると《ラズモフスキー》のチームは腕に覚えがあるグループかもしれないと嘉太郎は思った。

《狩》をするのは広島ของทีมで、バイオリンに
すぐく上手いのがいるという噂を聞いたと里子がい
っていた。

そこで、ホストカルテットとして最初に演奏する
ことにしている葉羅たちは何にするか相談が始まっ
た。選曲の条件は何処もやらない曲ということにし
た。

「しよっぱなに、しまらない演奏を長々とするのは

まずいからモーツアルトの初期をビシツと決めると
いうのはどう？」

というのは嘉子であつた。

「ビシツと決まるの？モーツアルトの初期だつたら
簡単と思うのは大間違いだよ」

とチェロの熊本匡。彼らしい意見だ。

「ビシツはともかくとして、私たちホスト団体とい
うことでしようけど、一応参加団体のひとつなんだ

から、本当にみんなが弾きたい曲を考えましょうよ」
とはセカンド・バイオリンの里子。

「それで、あんたは何がやりたいの」
と熊本。

「そうね、ラズモフスキーの三番」
そういつてから、里子は

「へ、へ、へッ」

と笑って見せた。みんなに

「とんでもない」

といわれそうだと思つたからである。

「いいじゃないですか。僕は二番でもいいと思ひますよ・・・でもというより二番がいいね」

こういつたのは意外にも熊本だった。モーツァルトの初期の弦楽四重奏曲が難しいといつておいて、何処から見てもはるかに難曲であるベートーヴェンの中期の作品を持ち出したのである。嘉子が聞き返す。

「二番で、ベートーヴェンの二番のこと？」

「そりや第八番、つまり《ラズモフスキーの二番》に決まってるじゃないか。そうなんでしょ熊本さん」と嘉太郎が熊本を見た。そんなこと当たり前だといわんばかりに熊本は、

「難しいに決まってるけど、われわれもこれくらいの挑戦はやっていいんじゃないの。それにモーツァルトが難しいというのは、ちよつと意味が違うん

だよね」

と自分がいった言葉に対していい訳めいたことを付け足した。

「僕はあるまり背伸びしすぎないで、二番なんかいいと思うね。《ラズモフスキー二番》じゃなくてただの二番の方ね。曲は充分にやりがいがあるいい曲だし、《ラズモフスキー二番》や《ラズモフスキー二番》よりも仕上がりはましじゃないかなあ」

と嘉太郎。

ベートーヴェンの第二番はいわゆる初期の弦楽四重奏曲といわれるもので、美しい作品である。熊本匡がいったのは嘉太郎が補足した通り第八番のこと、で、いわゆる「ラズモフスキー第二番」のことである。ベートーヴェンは第七番から第九番までの三曲をラズモフスキー伯爵に捧げているのでこの名がある。

嘉太郎は熊本とは違ふ意見を出したのだ。またこのパターンになつてしまつた。熊本匡と葉羅嘉太郎はお互いにあえて違ふ意見を出して議論を始めるのである。その空気を察した嘉子がいつた。

「みんなの意見だと、私以外はベーターヴェンだから、私もそれでいいわ。それに中期が二票だからラズモフスキーの二番か三番のどちらにするかで決めたら」

「ちよつと待つてよ。そんなに結論を急がんでも、もう少し議論すべきじゃないか。これは結構大事な問題だよ」

嘉太郎が、少しいらついた感じで嘉子にいった。

「じゃあ、どうぞ」

嘉子にそういわれて、ムツとしたのか言葉が出なかつた。かわりに里子が、

「私、さつき三番でいったけど二番でいいわ。ラズ

モフスキーのね。あれの第二楽章も第三楽章も素敵ですもの」

「素敵に出来ればね」

皮肉っぽくいったのは嘉太郎である。そして、

「ベートーヴェンは初期だからみやすいとはいわないけど、中期となるとガタツと難しさのレベルが何段階か上がるからね。僕は全国の愛好家が集まる場では、手の届くものをキチツとやりたいね。本当は

初期の一番がいいけど、エントリーの中に取り上げて
てるチームがいるからね。二番なら以前本番をした
ことがあるし、もう一度今のレベルでやり直すのも
悪くないのじゃないかと思つて」

「嘉太郎さんがいうことわかるんだけど、僕は弾い
ていてゾクゾクするようなのがやりたいんだよな
あ」

「二番じゃゾクゾクしないの」

「ラズモフスキーの二番に比べたらやっぱりゾクゾク度が違うでしょう」

「弾く人はゾクゾクしても、聞く人がゾツとしたんじゃないや洒落にならないでしょ」

「ラズモフスキーじゃない方の二番だったら、聞く人もゾクゾクするっていうの？」

「ラズモフスキーよりは可能性があるよ」

「嘉太郎さんは、いつも『我々の演奏は草野球と同

じだから、弾くものがどれだけ楽しめるかが大事だ』
っていつてるじゃないですか。今日はちよつと違
うんですね」

「だから、程度の問題をいつてるんですよ。やっぱ
り今度の場合は多少でもましな演奏をすべきじゃな
いの？」

やはり、嘉太郎と熊本は議論の草むらに入り込んで
しまった。

「僕は、今度の場合こそ弾くもの自身が感動を持つて弾いているところを実践して見せるべきじゃないかと思えますよ。集まってくる九団体の中には、きつとアマチュア離れしたようなすぐ上手いのもいるかもしれないけど、上手く弾こうとして音程や縦を合わせることに一生懸命になりすぎて、感動を何処かに置き忘れたようないわゆる小奇麗に纏める演奏をすることが多いと思うんでね、我々がホイッ

ト教授のところでは、いわれたことを実現することが、このような大会だからこそ意味が大きいのではないかね」

熊本匡は、自分の言葉に酔っているように演説した。みんなは、ウィーンでの『心に感じたままにこの美しいメロディが楽器から出ているかということだけを考えて弾きなさい』というホイット教授の言葉を思い出した。そして、そうするためには結局は、

単に音程や縦合わせだけでなく、名演奏家たちが聴衆を感動させるために駆使しているあらゆる演奏技術が必要なんだということに思い至って、『言うは易し行なうは難し』と行って行き詰まってしまったことも思い出した。

熊本の熱弁にも、嘉太郎はそんなこといっても、自分たちはその後の練習でも教授がいうようには出来てないじゃないかと思つたが、もう一度それに挑

戦するいい機会だとも感じはじめていた。

「そうだね、一年近くあるわけだしやってみようか。だつたらわれわれもラズモフスキーの一番でいこうか」

「競争するみたいで、それはよくないわよ」と嘉子。

「競争じゃなくて、どちらの演奏の何処がホイット教授のいうようなことが実現されているかいらないか

を比べやすいし、それはどうしてなのだろうということもわかるじゃないですか」

と嘉太郎。

みんなはしばらく黙り込んだ。《ラズモフスキー》の一番か二番かという問題で行き詰ったのではなかった。議論は歩み寄ってきたが、結論に近付いたのと同時に、自らに大きな課題を背負うことになるという思いがみんなの気持ちを重くしているのだ。四

人は、もしこの流れでベートーヴェンの中期に決まったら、課題を克服できるかどうかかわからない、というより少なくともこれまでには克服できなかつた大きな課題に立ち向かう「しんどい」という気持ちと、「やってみるか」という冒険に立ち向かうような気持ちが入り混じっていた。ずいぶん長い沈黙だったように感じられたが、町田里子が沈黙を破った。

「ラズモフスキーの二番、やってみましようよ」

これで決まった。四人の『心に感じたままに美しいメロディが楽器から出ているかということだけを考えて弾く』ことへの一年間の挑戦が始まったのである。

挑戦

練習を始めると、結局は音程の練習だったり、四人のタイミングを合わせる練習だったり、抑揚の幅を大きくしたり、その場その場にあつた音色を工夫したり、指が回らないフレーズをきちんと弾くためにひたすら繰り返して弾けるようにする個人練習と
いった、これまで、彼らがカルテットを組んで以来

やつて来たことの繰り返しであつた。

しかし、彼らの心の中にはつきりとした目標があるために、それらはむなしの繰り返し練習とは感じられなかつた。むしろ表現できるかもしれな
いという期待に後押しされた、ワクワクするような練習であつた。

それは、それぞれが家に帰つてする個人練習でも同じで、次に集まつたときにはみなは明らかに前回

より前進していることがお互いにわかるのだった。外見上はこれまでと同じことをしているようでも、四人の中に共通の目的が強く意識されているかどうかということによつて、こうも中身が濃く、熱のこもった練習になるものかと驚くほどである。だが当の本人たちは、そんな練習の本質の違いにさえ気付かないかのように練習に打ち込んだのだった。

そのような調子で《ラズモフスキー第二番》の四つの楽章を練習していくのに、一年間という期間は決して長くなかった。

軽快なギャロップのように進むプレストという最大級の速さが指定されている第四楽章は、特にファースト・バイオリンの嘉太郎にとっては、自分の持っている基礎技術のレベルを超えているために苦行の連続であつた。これを克服しようと嘉太郎は鈴鹿

美鈴の個人レッスンを受けて、いまさらながら基礎的な練習にも取り組んだ。

老人が急にレッスンを受けたからと行って、才能のある子供のような目覚しい進歩などあるはずがない。それで、これまで弾けなかったベートーヴェン中期のプレストが弾けるようになるのだったら誰も苦労しない。それでも嘉太郎は僅かな進歩でも獲得したいと意欲的に取り組んだ。

このプレストの楽章に苦勞したのは嘉太郎だけではない。セカンド・バイオリン以下の三人も当然プレストで弾かなければならないのだ。しかしこれまでは、速くて出来そうもないフレーズが出てくると、「出来なくても仕方がない」として、ぐちゃぐちゃのまままで通り過ぎていたのだが、今回は誰もそのような妥協をしようと思わなくなっていた。

もちろん思うように行かないのはプレストだけではなかつた。第一楽章では、第四楽章ほどではないが速い動きを正確に弾かなければならない動きが四人全員に出てくる。しかもそれは別々にではなく、二つのパートがファイギアスケートのデュエットのように三度の音程で一緒に動いたり、二人になつたり、四人が一緒に動くこともある。こういうところは上手くシンクロすると、これほど気持ちのいいことは

ない。でもめつたに上手くはいかない。プレストではなくても十六分音符が何小節も続くようなところを、気持ちよくなるように合わせるのは、嘉太郎たちにとっては至難の業である。一人一人はメトロノームに合わせて練習して何とかできて、四人そろってするとシンクロしている感じが出ないのである。またあるパートから別のパートにそのような速いフレーズが引き継がれるところでは、気持ちのいい連

続感がなかなか出せない。

特訓したからといって、もともとしつかりした基本的な技術をマスターしていない嘉太郎たちにとつて、それは不可能に近いと思えることであつた。

彼らは音の粒を音程も含めて完全に合わせるということは諦めて、流れの中の抑揚や弓の速度を出るだけ合わせるようにした。するとプロのようには出来ていなくても、音楽の感じはかなり表現できる

ように思えた。

そのように譜面を見ただけで誰もが大変そうだと思うようなところだけでなく、二つの和音を鳴らす冒頭だけでも納得がいくようになってなかなか出来なかつたし、一小節の空白をはさんで始まる第一主題もぜんぜん思うようには弾けなかつた。どのよう弾きたいかということ、四人の意見がいつも一致するとも限らなかつた。そもそも

「どのように弾きたいか」

ということをはつきりとイメージすることすら簡単でなかった。

この第一主題のところにはベートーヴェンはピアノ、ツシモを指定しているが、これをある程度はつきりした音で弾くべきだと主張する嘉太郎と、聞こえないくらいでもいいからピアノ、ツシモにこそこの部分の真髓があると主張する熊本の意見はなかなか一致

しなかった。熊本は、ここは譲れないというような調子で、

「ピアノニツシモで二小節やって、一小節間の沈黙が来るでしょ。またピアノニツシモの二小節でそのあとにも一小節の沈黙がくる。このベートーヴェンの苦心の演出を平凡な感じにしてしまったら台無しじゃないですか」

熊本匡の言葉には怒気にも近い迫力がある。

「何やってるのか聞こえなかつたら何にもならん」と嘉太郎も負けてはいない。

「最初の二つのフォルテの和音で、聞いてる人たちの耳は何事が起きるのか固唾を吞んで待つのだから、聞き耳を立てないと聞こえないくらいでやるべきなんだ。それがジュリエット・グレコのような囁く声でも、ルイ・アームストロングのようなしわがれ声でも問題じゃないんですよ」

熊本匡は、彼が知っている数少ないクラシック以外のミュージシャンの例を出して説得しようとした。

この部分については明確な結論が出ないままになった。しかし、再現部で冒頭と同じように二つの和音が鳴らされるとき、今度はフォルテッシモになっている。しかも続く沈黙の一小節のところは、ここではバイオリンとチェロがピアノで一六分音符の合点の手を入れてから、ピアノッシモの主題が来る。

ここで彼らは合いの手のピアノと主題のピアノニツシモを弾きわけける必要に行き当たる。ここでも議論が起きたが、結局冒頭も熊本が主張したように主題は本当に微かな感じのピアノニツシモにしようということになった。

このように自分たちに欠けている基本技術を鍛えなおしながら一音たりともおろそかにしないという心構えの取り組みが熱く続いた。彼らは、上手く弾

けなかつたところも、ある程度弾けるようになっただけで合格とはしなかつた。かつての葉羅たちだつたら、弾ければよしとしただろうが、いまの彼らにとっては何とか弾けるようになったら、それが出発点であつた。不十分とはいえ、わずかでも獲得された技術を使つて表現を試みるのである。

小さいときから音楽一筋に育つた音楽家たちは、楽譜に書かれたことを大体は再現できる。それだけ

で一応音楽として成り立つ。プロともなると

「音楽性のかけらも無い」

というような人はいないから、ある程度感情表現があれば

「上手い人だ」

といわれることも少なくないし、実際に一見良い演奏のように思わせる。しかし、楽譜を完璧に弾けることは単なる道具を揃えたというに過ぎない。世界

で通用する演奏家というものは、その豊富な道具を使つてどう音楽にするかで勝負しているのである。

余談だが、上手いアマチュアといわれる人たちの中には、その道具をある程度手に入れるとそれで満足している場合が少なくない。しかも素人がそんなに弾けると周りのものはびつくりするし、賞賛する。たしかにそこまで技術を身につけたことは賞賛に値するが、その道具の使い方を知らないと、演奏は小

奇麗なだけで感動の無い退屈なものになる。

嘉太郎たちは、四人ともひとが驚くような素人離れした技術を持っていない。だがこれまでの練習では、ある程度音が取れるようになったらそれでよしとしてきた。もちろん感動の無い小奇麗なだけの演奏を目指したつもりは無いが、本当の音楽への道のりは、必要なだけの技術を充分に持ち合わせないものたちにとってはあまりにも遠いために、『何とか弾

けた』所で、それ以上追求することをやめてしまつていたのである。実は、それは音楽の入り口にたどり着いたわけだから、そこからの努力は実り多く楽しいものであるはずなのに惜しいことである。

ところが今回葉羅たちは、弾けるようになるのは単なる準備が出来ただけだとして、それを到達点と考えず、さらに先に進んでいる。外から彼らが練習している姿を見ただけでは、これまでとあまり変ら

ないように見えるが、本人たちにとってはこれまで経験したことも無い新鮮な取り組みに感じられているのである。

「こういう練習は面白いもんだね」

と熊本がいうと、嘉太郎も、

「ホイト教授がいったことが、いまははっきりと理解できるね。あするときも理解できたつもりだった

けど、やっぱり本当に実現してみたいと思つたときに初めてわかるもんなんだね」
としみじみという。

「技術の大切さも、なんかこれまで以上に痛感されますわ」

といったのは里子である、彼女は続ける、

「そうは思つても、いまさらたいした技術が手に入るわけは無いんだけど、ほんの少しでも自分の技術

がましになると、それを使って可能になる表現は増えますものね。これまでどうしてこんなことに気付かなかったのかと思いますわ」

「里子さん、いいこというね。練習で何かがひとつ出来るようになる、自分の絵の具箱に欲しかった新しい絵の具が一色加わったみたいな感じだよね」

「よくわかるね。ただ絵の具と違って手に入れたものは、ちよつとでも油断するとすぐに逃げてしまう

から困っちゃうよね」

「そうそう、常に磨いとかないとね。なんか音楽作りに開眼したような話してるけど、まだぜんぜん低いレベルでの話しだよ。でも高いレベルなんて望んでも我々が得られるものは限られていることは間違いないんだから、このなけなしの技術で出来ることを最大限にするということかね」

熊本の結論めいた言葉に、みんなは少ししんみりし

て頷いた。

「そうと知っていたら、若いときからもつとちやんとやっついていればよかった」

と嘉子がいうと、

「それをいっても仕方がないよ。私たちはプロの音楽家になろうとしたわけじゃないから、音楽以外のことで一応プロとしてやってきたのだから。それはそれで後悔することじゃないよ。本業があつてしか

もそれ以外にこんな楽しみが味わえるのだから、人生楽しいじゃないの」

と嘉太郎。

「間違いない。嘉太郎さんは間違いない第一級のプロの医者だしね」

「お互いにそうだよ。だから専門家から見たら未熟な演奏にしかならないとしても、こうして練習への取り組み方に気付いただけでも本当によかったと思

うよ。音楽で遊ぶ、遊び方が少しわかってきたといえるのかもしいね。それでも聞く人に違いがわかるかどうかからん程度だろうけど」

「まあ、そうかも知れないけどそれはそれでいいんじゃない。さあ、休憩はこれくらいにしてもうひとがんばりするか」

熊本の一声で四人は立ち上がった。

(了)

*この物語はフィクションであり、登場する人物、団体名などは、《ブタペスト四重奏団》、《イザイ》、《ブゾーニ》、《グレコ》、《アームストロング》、それとピアノ・メーカー名、ヴィグモアホール、作曲家名、作品名を除いてそれ以外はすべて架空のものです。

〔この物語の登場人物など〕

葉羅嘉太郎・・・主人公。院長を長く勤めた「はら病院」を息子に後を継がせて引退し、若いときから趣味で続けてきたバイオリンに余生をかける。弦楽四重奏団のファースト・バイオリン。

葉羅嘉子・・・嘉太郎の妻。嘉太郎のプロポーズの言葉は「嘉子と嘉太郎なんていい組み合わせだね」だった。弦楽四重奏団のビオラ。

町田里子・・・葉羅たちの弦楽四重奏団のセカンド・バイオリン。嘉子と同年代。

熊本匡・・・葉羅たちの弦楽四重奏団のチェリスト。定年後の生活を音楽にかけている。

山科武彦・・・株式会社《ミュージック・プロデュース》の担当課長

吉川末子・・・山科の助手。ミニスカートの若い女性。

平成アーツ・・・世界的なアーティストを数多く招聘するいわゆる呼び屋。葉羅と《ミュージック・プロデュース》の山科による企画を担当するのは国重。鈴鹿美鈴・・・葉羅たちが四重奏のレッスンを受ける指導者。地元のプロ・オーケストラの団員で自らも弦楽四重奏を定期的にやっている。

山根倫子・・・望巖カルテットハウスに出演した最初のピアニスト。葉羅が最高の室内楽ピアニストと

して評価している。

ホイツト教授・・・嘉太郎たちがウィーンでカルテットのレッスンを受けたもと著名なカルテットを主催していたバイオリニスト。

上沼正・・・広島で活躍するバイオリニスト。葉羅たちが尊敬する音楽家。親しくしていて、一緒にカルテットで遊んだりしたこともある。

夏目一水・・・葉羅が上沼と同じように、その高い

音楽性のゆえに尊敬するチェリスト。名前はカズミと読むが、一般にはイツスイと呼ばれている。

ヨハネス・ブラームス弦楽四重奏団・・・望巖カルテットハウスのこけら落としに登場した世界的な弦楽四重奏団。

エムニア・カルテット・・・アマチュア弦楽四重奏フェスティバルのゲストカルテット。アメリカの団体で、世界的な一流弦楽四重奏団。

ファツイオリ・・・スタインウェイを凌駕するため
に作られたイタリアのピアノ製造会社。その優秀さ
は徐々に認められ始めている。

望巖カルテットハウス・・・葉羅が宮島（巖島）を
対岸に見る場所に私財を投じて建てた室内楽専用ホ
ール。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

裸の王様は何処へ行く

2022年11月12日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：www.photo-ac.com

・タイトル：三重県総合文化センター

作者：oopsさん

写真のID：22989961

・タイトル：タイトル：厳島神社 大鳥居

作者：akabaさん

写真のID：3366522

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
